# 第 17 回

# 神奈川県遺跡調查 • 研究発表会

発 表 要 旨

1993 (平成5) 年9月19日 (日) 於秦野市文化会館

主催 神 奈 川 県 考 古 学 会 共催 秦 野 市 教 育 委 員 会 後援 神 奈 川 県 教 育 委 員 会協力 秦野市立桜土手古墳展示館

# 発表 会次第

### I 開会

Π		発	表	(午前の	部)												
	1.	藤沢	市南	葛野遺跡	•••	•••••	••••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	••••	須田第	É—	1
	2.	大井	町第-	一東海自	動車	道№ 3	5 遺跡	•••••	•••••	₫	西川修-	<b>- ·</b>	天野賢	₹—·	伊藤兒	长憲	5
	3.	小田	原市	久野 2 号	墳	•••••	••••••	•••••	•••••	L	山内昭	<b>=</b> •	野崎欽	大五・	西山博	尊章	8
	4.	秦野	市太	岳院遺跡	先土	器時代	の調査	••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•	大倉	潤	11
Ш		記	念 :	公演													
	ſ#	世城	館遺	跡につい	て」	•••••	•••••		•••••		]	東海	大学教	<b>女授</b>	石丸	熈	14
IV		発	表	(午後の	部)												
	5.	海老	名市	相模国分	寺塔	跡 …	•••••		•••••	•••••	•••••	•••••	••••••		須田	誠	16
	6.	三浦	市新:	井城跡	••••	•••••	•••••	•••••	•••••		•••••	•••••	•••••	••••	武藤原	表弘	19
	7.	平塚	市山	王A遺跡		•••••	•••••	•••••	•••••		•••••		日野-	一郎・	上原正	E人	23
	8.	横浜	市観	福寺北遺	跡(	関耕地:	地区)		•••••	•••••	•••••		浅川禾	ij— <b>·</b>	田村島	复照	27
	9.	横須	賀市	小荷谷遺	跡	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••		•••••	••••	中三川	昇	31
	10.	清川	村宮	ヶ瀬遺跡	群表	の屋敷	遺跡の調	周査	•••••	•••••			近野』	E幸・	岩崎	修	34
	11.	横浜	市綱	崎山横穴	墓群	の調査	•••••		•••••	•••••			鹿島保	ママスティス マスティス マイ・スティス アイ・スティス アイ・ス アイ・スティス アイ・ス アイ・ス アイ・ス アイ・ス アイ・ス アイ・ス アイ・ス アイ・	鈴木重	€信	38

## Ⅴ 閉 会

### 1. 藤沢市南葛野遺跡

須田 英一

- 1. 所 在 地 藤沢市葛原2,035-1他
- 2. 調 查 主 体 南葛野遺跡発掘調査団(団長 寺田兼方)
- 3. **調査担当者** 須田英一・関根唯充・桜井準 也
- 4.調査目的 神奈川県土木部による主要地 方道横浜伊勢原線(用田バイ バス)改良工事に伴う事前調 香
- **5.調査期間** 平成4年6月15日~平成5年9月31日(予定)
- 6. 調査面積 約8,353㎡

### 7. 遺跡の立地

本遺跡は、相模原台地西側に隣接する高座丘陵北東部に位置し、小田急江ノ島線長後駅から西方約3kmの地点にある。近隣の同一丘陵上、南西2kmには慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡がある。地形的に調査区東側が引地川の支流の一色川の小支谷によって開析された丘陵部、西側が目久尻川支流の最奥部に面した丘陵部に当り、両河川の分水嶺に位置している(図1)。

### 8. 調査の経緯

本遺跡は平成3年度に実施された県文化財保護課による試掘調査の結果を受けて、本格調査が実施された。本遺跡では25mの道路幅を約450mにわたって調査を行うため、調査区を東から順にAからFまで6つの調査区に区分した(図2)。また、土木工事との兼ね合いから、調査は最東部に位置するA区から着手し、B区・E区最西部、C区・D区、E区残部、F区の順に、主に西に向かって調査が進められた。

これまでの調査成果の概要、特に先土器時代 については第10回藤沢市遺跡調査発表会におい て発表されている。今回は、縄文時代を中心に 調査成果の概要を報告する。

### 9. 調査の概要

本遺跡の層序は以下のように区分される。 I a 層は宝永スコリアより上層で近世中期以降の遺物を包含し、 I b 層は宝永スコリアより下層

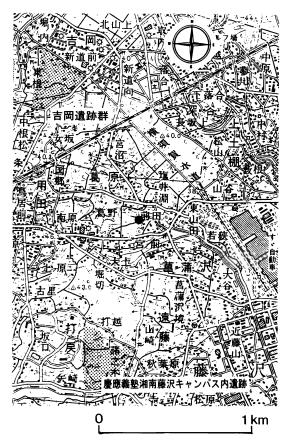


図1 遺跡位置図 (S=1/50,000)

で古代から近世前期の遺物を包含する。Ⅱ a層は古墳時代から古代の遺物を包含し、Ⅱ b層は縄文時代後半から弥生時代の遺物を包含する。Ⅲ a層は縄文時代中期から後期の遺物を包含し、Ⅲ b層は上部で縄文時代中期、下部で縄文時代早期の遺物を包含し、Ⅲ c層では縄文時代草創期の遺物を包含する(図3)。

調査方法は、黒土層についてはⅡ b 層上面、Ⅲ b 層上面、Ⅲ c 層及びソフトローム層上面で遺構確認を行いながら調査を行った。ローム層(先土器時代)の調査はローム層上面で2×2×2 mの試掘坑を、調査面積の11%の比率で設定し、遺物が出土した箇所を拡張することにより、先土器時代の調査を行った。その結果、各

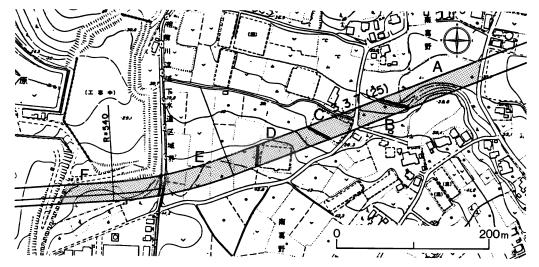


図 2 調査区分図 (S = 1/5,000)

調査区共に約20%程度の調査比率となった。

#### <遺構>

A区 丘陵斜面部と低地部分に計4カ所の試掘 トレンチを設定・調査したが、攪乱が甚だしく、 遺構・遺物は一切存在していない。

B区 先土器時代石器集中部2ヶ所(B1層下部~L2層、L1H層下~B1層上層)、単独分布1カ所(B1層下部~L2層下部)。縄文時代草創期遺物集中部1ケ所、炭化物分布2ケ所。古代~中世円形土壙1基、中・近世溝(宝永以前)2条、

**C区** 先土器時代石器・礫少数分布1ケ所(B2U層)。縄文時代炭化物集中1ケ所(谷部)。 古代~中世円形土壙12基、中・近世溝3条。

D区 先土器時代石器集中部 2 ケ所、炭化物集中 1 ケ所 (L 1 H層下部~B 1 層上部)、礫単独分布 1 ケ所 (L 2 層下部)。縄文時代早期棒状礫・礫器集中部 1 ケ所 (約70×40mの範囲で緩斜面部を中心とした分布範囲をもつ)、長楕円形土坑21基。古代~中世円形土壙 2 基、中・近世溝 1 条。

E区 先土器時代石器集中部1ヶ所(B2U層)、少数分布4ヶ所(L1H層下部~B1層上部,B2層)。縄文時代早期土器集中部、前期・後期土器集中部各1ヶ所。古代~中世円形土壙6基、中・近世溝1条。

F区 先土器時代石器集中部2ケ所(B1下層、 B2層)、礫集中部2ケ所(B1下層、B2U 層)、炭化物分布1ケ所(B2U層)。縄文時 代早期棒状礫・礫器集中部1ケ所、円・長楕円 形土坑2基。古代~中世円形土壙1基、近世溝 2条、土坑4基。防空壕。

#### <遺物>

B区 先土器時代ナイフ形石器、剥片、縄文時 代草創期爪形文土器、尖頭器、礫器、剥片、中 期(曽利式)土器片、中・近世陶磁器、かわら け等。

**C区** 先土器時代ナイフ形石器、剥片、礫、縄 文時代早期条痕文土器片、後期(称名寺式)土 器片、平安時代土師器、中・近世陶磁器、かわ らけ等。

D区 先土器時代ナイフ形石器、掻器、剥片、縄文時代草創期爪形文土器、尖頭器、植刃、早期(撚糸文・条痕文)・中期(勝坂式)土器片、石鏃・打製石斧・磨石・礫器・棒状礫・剥片、中・近世陶磁器、かわらけ等。

E 区 先土器時代ナイフ形石器、掻器、削器、剥片、縄文時代草創期尖頭器、早期(条痕文)・前期・中期・後期土器片、石皿・打製石斧、中・近世陶磁器等。

F区 先土器時代ナイフ形石器、尖頭器、石核、 剥片、礫、縄文時代草創期尖頭器、前期・中期 土器片、礫器・棒状礫。

各時代の概要は、以下のようである(図 3)。 先土器時代

A区を除くすべての調査区から遺物が出土し、

文化層は現時点で以下の4枚が確認されてい 第4文化層(B2U層) る。第1文化層 (L1H下部~B1層上部) 縄文時代 第2文化層(B1層下部) 草創期 第3文化層 (B1層下部~L2層) B区の斜面部とD区の早期遺物集中部内で遺 0-I b 10cm 棒状磔 I a 1-II ь 5 cm **I**c L 1 S BO 爪形文土器 L<sub>1</sub>H 2-第1文化層 Вı 第2 文化層 第3文化層 3-L 2 第4文化層 5cm 図 3 土層柱状図と出土遺物

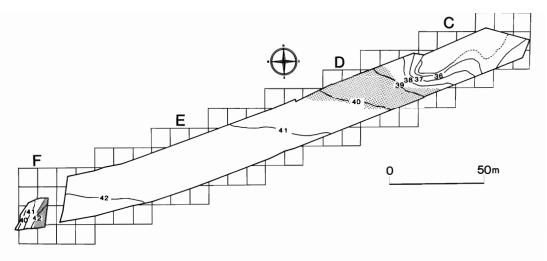


図4 棒状礫の分布

物が出土している。他にE区で尖頭器が3点出土している。このうちB区では爪形文土器片と剥片類が約3mの範囲からまとまって出土し、すぐ脇では同時期の炭化物集中も2ケ所確認されている。D区では早期遺物集中部内で爪形文土器片と植刃が出土している。また、その分布域を中心にL1S層まで調査を行ったが、他に草創期の遺物は出土しなかった。

#### 早期

C区の西側谷部で炭化物集中に伴って撚糸文 土器片がまとまって出土している。また、D区 の緩斜面から調査区の北側を中心とし、多量の 棒状礫及び亜円礫を素材とする大型礫器・剥片 類からなる石器群と若干の土器片が出土し、そ の周囲からは同時期の円形・長楕円形土坑21基 が検出された。石器群の分布域は約東西70m× 南北40mに及ぶが、この分布は調査区外北側方 向へかなり広範囲に広がるものと思われる。石 器群中の棒状礫は長さ10~15cmで、磨痕・敲打 痕のあるものが若干混じるが未加工のものがほ とんどで、焼成痕も見られない。土器に関して はすべてが早期末葉の条痕文土器である。F区 でも小規模ながら同様の石器群が検出された (図4)。E区では、早期後半の条痕文土器が まとまって出土している。

### 前・中・後期

B・C区の埋没谷より廃棄されたと思われる 土器が2個体集中して検出された。B区では中 期曽利式土器片、E・F区では前期諸磯式土器、 C区では後期称名寺式土器片、F区では中期加 曽利E式土器が出土している。

#### 中・近世

C~F区で古代末~中世に属すると思われる 円形土壙が多数検出された。また、B~F区に かけて台地部及び斜面部に宝永スコリア層直下 に掘り込み面が見られる溝が主に北西-南東方 向に7条確認されているが、覆土からは遺物が ほとんど出土していない。遺構外から出土した 遺物は陶磁器、かわらけ、土製品、鉄釘等であ るが、他の遺跡に比べ近世遺物が少なく、中世 後半の遺物が目立つことが特徴である。

### 10. ま と め

D区から縄文時代早期末の多量の棒状礫及び 楕円礫を素材とする大型礫器・剥片類からなる 石器群が出土し、F区からも小規模ながら同様 の石器群が検出された。地区を隔てながらも両 者共に谷部の緩斜面に出土するという特徴を持 ち、調査区外北側方向へかなり広範囲に広がる 可能性もある。これらの石器群と類似する遺跡 として東京都東久留米市向山遺跡が挙げられる が、他に類例の少ない石器群であり、今後、整 理作業において詳細な検討を加え、その性格づ けを行う予定である。

### 2. 大井町 第一東海自動車道 No.35遺跡

西川修一・天野賢一・伊藤宏憲

- 1. 所 在 地 足柄上郡大井町大字柳字下矢 営まれている。またこの南東部の断層谷の湧水 頭396-1他
- 2. 調査主体 神奈川県教育委員会
- 3. 実施機関 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 4. 調查担当者 西川修一·天野賢一·伊藤宏憲
- 5.調査目的 第一東海自動車道(改築)に 伴う事前調査
- 6. 調 查 期 間 平成 4 年 6 月17日~平成 5 年 1月22日
- 7. 調査面積 1,860㎡
- 8. 遺跡の立地 (第1図)

神奈川県立埋蔵文化財センターでは平成2年 度より第一東海自動車道改築に伴う埋蔵文化財 の発掘調査を厚木~大井松田インターチェンジ 間で実施しているが、大井地区のNo.34~36遺 跡はその最も西端に位置している。

ここでは平成4年度に実施した調査の一部で あるNo.35遺跡の概要を紹介する。

遺跡はJR御殿場線相模金子駅の東方、丹沢 山塊の南西部・大磯丘陵西端に所在し、標高19 0m前後の尾根頂部の緩斜面に営まれている。

酒匂川と川音川の合流部の左岸には、断層の 活動により大磯丘陵から切り放された「通称」 金子台 | が広がっており、縄紋後期~晩期の配 石遺構・土壙墓などが検出された金子台遺跡が 点近くの中屋敷遺跡からは縄紋晩期~弥生初頭 の土器片などと共に容器形土偶などが発見され ている。

### 9. 調査の概要

### 〈発見遺構〉

近 世 溝6・道状遺構2・土坑1

古 代 円形土坑18

### 縄紋時代

晩期:炉跡1・土坑2・炭化物集中3 前期:竪穴住居跡3・土坑31・集石15 ピット19

地震跡等 地割れ7・地滑り3を調査

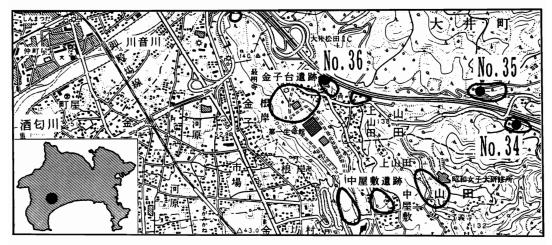
### 〈発見遺物〉

縄紋時代 土器(前・後・晩期)・打製石斧・

磨製石斧・磨石・玦状耳飾等

整理箱 215箱 計

近世~古代 各遺構とも出土遺物は皆無であり、 年代は土層で判断した。溝は畑の区画に関する 遺構であると考えられる。また調査区西端で検 出された道状遺構は階段状に構築されていた。 縄紋晩期 調査区東側斜面の™層(黄褐色スコ リア層) 中で検出された1号炉跡(第2図右上) は炭化物層の上に、燃焼部分が確認され、土器



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

片が少量出土した。また周辺の同一層面から若 干の土器片・炭化物が散漫ながら検出された。

これらの遺構・遺物はほぼ同レベルから検出されており、出土土器は晩期終末ものに限られる。短期間の野営地との想定も可能であろう。 縄紋前期 前期に属する遺構・遺物は丘陵尾根部(調査区中央部)標高187~189m前後の部分に集中している(第3図)。 X層(暗褐色土)には前期の豊富な遺物が包含されており、多量の土器・石器・焼礫等が出土した。

遺構はXI層(富士黒土土層下部)で検出した。竪穴住居跡は3棟検出されたが、集落の範囲は更に北側に広がっていると考えられる。

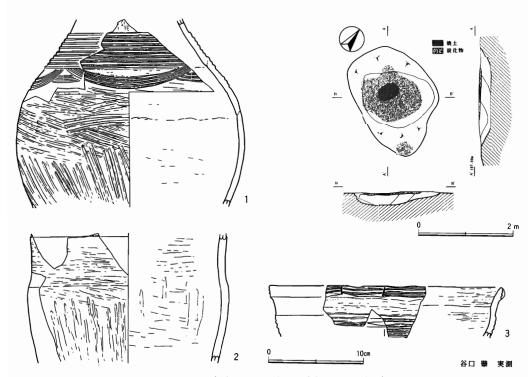
このうち1号住居跡の床面は南北方向に走る 地割れ(幅70~140cm)によって引き裂かれて おり、住居全体の約1/3が東に向かってほぼ水 平に移動していた(第4図左・中)。この1号 住居跡では約3,000点もの大量の遺物が廃絶後 に流入していたが、諸磯式が主体を占めている ようだ。その中でも地割れ内から完形の浅鉢2 個体が伏せた状態で検出された点が注目される (第4図左の★印)。その出土状態は何らかの意 図のもとに置いた状況を髣髴させるに充分であ り、地震災害に対する縄紋人の精神世界の一部 を伝えている可能性が高いと考えられる。

該期の土器組成において浅鉢が占める割合が 一般的に低いことを考慮すると、非日常用の土 器が使用されていると積極的に評価することも 可能であろう。

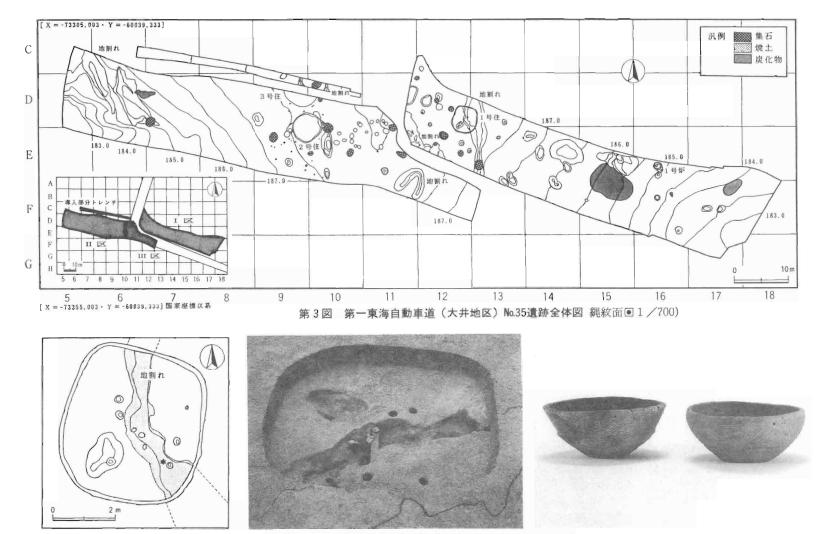
出土遺物としては諸磯b式を中心として、若 干の時間幅を有する土器群と伴って、多量の石 器群(石匙・磨製石斧・打製石斧等)が出土し ており、良好な資料を提供している。また写実 的にイノシシを表現したものを含む多様な把手 のバリエーションが出土している。更に縄紋各 期の土器の他、玦状耳飾り(断片)等も出土し ている。また大歳山式土器など他地域の土器が 混在している点も注目される。

### 10. ま と め

縄紋前期の豊富な出土遺物は今後の分析で編年的・地域色の検討に良好な資料となろう。また地震考古学の面からも重要な資料を提示できた。また縄紋晩期終末の資料も編年的資料として、また集落論の面からも分析が必要である。



第2図 No.35遺跡 1号炉跡 及び出土土器 (一部)



第4図 1号住居跡と地割れ 及び地割れ上より出土した浅鉢

### 3. 小田原市久野2号墳

山内昭二・野崎欽五・西山博章

- 1. 所 在 地 小田原市久野字一本松1302
- 2. 調查主体 小田原市教育委員会
- 3. **調査担当者** 久野諏訪ノ原古墳発掘調査団・ 山内昭二
- 4. 調査目的 久野古墳群調査整備事業に伴 う基礎資料の収集
- 5. 調査期間 平成4年7月29日~9月13日
- 6. 調査面積 約750㎡
- 7. 遺跡の立地

本古墳は、箱根外輪山の一部である明神ケ岳 から東に延びる久野丘陵(久野諏訪ノ原台地) に位置し、標高は約90m、丘陵北側を流れる狩 川、南側を流れる久野川との比高差は約80mを 測る。また小田原市の中心部からは北西約 4 km の距離にある。この久野丘陵一帯には縄文時代 早期から中・近世に至るまでの数多くの遺跡が 確認されている。特に古墳は丘陵の南半部に広 く分布しており、久野諏訪ノ原古墳群と呼ばれ ている。また古くは「久野百塚」「久野九十九 塚」とも称され、「新編相模国風土記稿」にも 多数の古墳が存在していたことが記されている が、破壊されたものも多く、現在は40基ほどが 確認できるのみである。その中で最大の久野1 号墳(直径約60m)は別名「王家」とも言われ る円墳で、本古墳の東方約750mの丘陵東端付 近に位置しており、周溝部分の調査が行われて いる。そのほかにも 4 号・6 号・15号の各墳が 調査され、いずれも横穴式石室を有することが 確認されている。

### 8. 調査の概要

#### <遺構>

調査以前の平面形は、長径12m、短径9.5m ほどの、南北方向に長い楕円形状を呈し、墳丘 高は北西側で約1.5m、南東側で約2mであっ た。墳頂部には天井石と思われる礫が顔を覗か せ、しまりのない腐食土層が30cm程堆積し、直 下で石室上部が検出されたことから、墳丘上部 は削平後再堆積されたものと思われる。

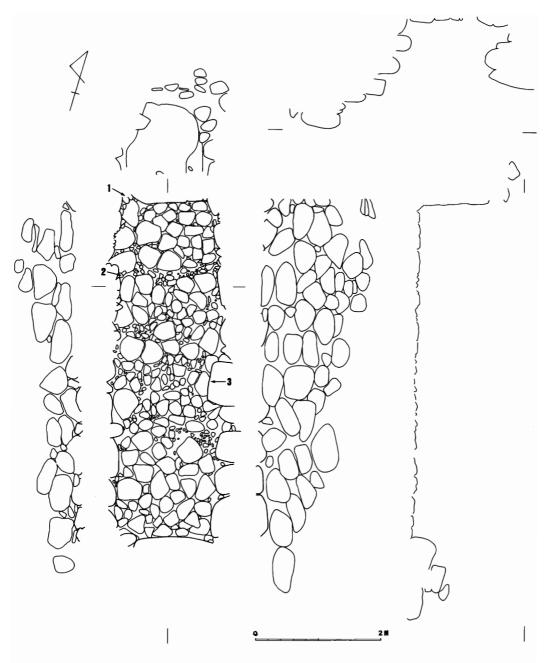
周溝は、墳丘の北東側と北西側で検出された



第1図 遺跡の位置 (1:50,000)

溝状の遺構が相当すると思われるが、かなり削平を受けていると考えられ、確認面における規模は幅が約70~90cm(溝底の幅は約60~70cm)、深さが20~30cmである。これを周溝とすると、本古墳本来の規模は直径18~20mの円墳と推定される。

内部主体は玄室部のみ検出され、南南東の方 向に開く、全長約5.6m、幅約1.6mの袖無型横 穴式石室である。羨道部及び前庭部は確認でき なかった。検出時には天井石及び西側側壁上部 が崩落し、東側側壁が外反した状態であったた め石室内の正確な高さは不明であるが、東側に ずれた天井石と奥壁(幅・高さとも約1.2m) から推測すると、1.5m前後ではないかと思わ れる。石室の崩落は本古墳とほぼ同じ規模の石 室を有する4号墳においても見られ、その状況 から、西から東の方向への非常に大きな衝撃 (地震か) を受けたことが原因と考えられる。 側壁には小口径60cm前後、長さ1m前後の河原 石を用い、裏込石には拳大よりやや大きめの礫 が用いられている。床面は、入り口・奥壁付近 には径20~30cmの偏平な河原石が、中央部には それに混じって径10~15cmほどの小礫が敷き詰 められている。排水溝等の施設は、床面では確 認されなかった。閉塞は、幅約1.4m、高さ50



第2図 内部主体

cm程の大きな石を横たえその上に径30~40cmの 礫が不規則に積まれている。なお、整備を目的 とするため、床面及び閉塞部は除去しなかった。 <遺物>

本古墳は一部に盗掘坑が見られたが、前述の 崩落のために床面までは到達しておらず、盗掘 の被害はなかったと考えられる。今回の調査で 出土した遺物は以下の通りである。

金銅装円頭大刀1、直刀3、刀子5、鉄鏃25 前後、鉄製品多数、金環9、勾玉3、管玉2、 切子玉4、丸玉20前後、小玉90以上、須恵器破 片少量、朱・木片少量。

金銅装円頭大刀は奥壁前に、切先を西に、棟を南に向けた状態で出土しており、鞘尻・鞘口金具、足金具が残り、喰出鐔を有している。全長約85cm、刀身は約60cmである。保存状態は良くないが、柄には一部に木質が残っている。

直刀は奥壁西側隅(1)、奥壁から約1.3mの西側壁際(2)、同じく約3mの東側壁のせり出した石の下(3)の3カ所から出土している。1のものは切先を上に向けて立て掛けた状態で出土しており、全長が約33cmと他の2本に比べてやや小ぶりである。刀身は約25cm、幅は切先側で2.5cmである。2のものは全長約76cm、刀身約69cm、幅は切先側で3.0cm、倒卵形8窓の短径が推定7.5cmである。3のものは全長約90cm、刀身約83cm、幅は銹のため正確には分からないが3cm程ではないかと思われる。鐔は倒卵形8窓のものが装着されており、それに銀象嵌が施されていた。またこの直刀は側壁石の下敷きになっていたために多少ゆがんでいる。

刀子は奥壁から約1mの西側壁際に2本、約2mの西側壁際に1本、約2.3mの東側壁際に1本というように散在していた。完形品はいずれも研ぎ減りが激しい。

鉄鏃は奥壁付近と石室中央部西側壁際からまとまって出土しているが、その方向に統一性は見られなかった。形態は、全て有茎で平根式と 失根式とがある。前者には片刃箭式・三角形腸 抉式・五角形式などがあり、後者には鑿箭式・ 片刃箭式などの種類がある。

そのほかの鉄製品には、鞘金具の一部や吊り

金具、両頭金具状のものがあり、また小さな鉄 片も、奥壁付近とその手前2m付近の東側壁寄 りを中心に多数出土している。

次に玉類であるが、勾玉はいずれも石室中央部から出土しており、全てヒスイ製である。管玉は石室中央部やや東寄りから出土しており、いずれも碧玉製であり、太身と細身とがある。切子玉も石室中央部やや東寄りから出土しており、全て水晶製である。その他の玉類としては、丸玉、小玉、臼玉があり、いずれもガラス製である。丸玉はほとんどが石室中央部やや東寄りから、小玉は石室中央部付近からまとまって、大田である。色は紺色がほとんどであるが、1.5cm程のものも1点ある。

金環は奥壁から3m以内のところに散在しており、玉類とは異なった分布である。全て銅芯金張製で、太身・大型のものと細身・小型のものがある。9個中8個はそれぞれ対になるが、1個だけ対になるものが検出できなかった。

次に須恵器は、聴と大型の甕の破片が少量出土している。全て石室床面からかなり浮いたところで出土しており、その性格については検討中である。そのほか朱の小塊が石室中央部やや東寄りから少量出土しており、また木片もわずかではあるが出土している。人骨は形の残っていたものは歯のみで、残りは骨粉が散在している状況であった。埋葬された個体数等は不明である。

### 9. ま と め

今回の調査結果から、本古墳の築造年代は6世紀後半~7世紀初頭ではないかと考えられるが、まだ整理中であるので、詳細は本報告に譲りたい。小田原市域は、それほど古墳の調査が行われていない地域であり、今後行われる他の古墳の調査の結果と併せ考えることにより、今まで明らかでなかった古墳時代後期の様相が明確になるのではないかと思われる。

### 4. 秦野市太岳院遺跡先土器時代の調査

大倉 潤

- 1. 所 在 地 秦野市尾尻
- 2.調査主体 太岳院遺跡発掘調査団 (団長 杉山幾一)
- 3. 調査担当者 大倉 潤
- 4. 調査の目的 秦野駅南部区画整理に伴う事 前調査
- 5. 調査期間 平成4年8月24日~10月29日
- 6. 開発面積 75㎡
- 7. 遺跡の立地

小田急線秦野駅の南方約100m、秦野盆地の 南東部に張り出した標高100m前後の微高地上 に位置する。地形は緩い傾斜をもって室川の流 れる東の谷に向って下がっている。周辺には多 くの湧水池があり、盆地内でもかなり低い場所 である。

本遺跡は古くからその存在が知られており、 特に縄文晩期の遺物が出土する遺跡として注目 されている。

### 8. 調査の概要

表土を剥ぐとすぐにローム土が現れ、後世にかなりの規模の削平を受けていることが確認された。削平は場所によってはLISに達していた。本遺跡のほぼ全域で認められるLIS-B0間にみられる層滑りとともに調査区の東端においては大規模な地割れが確認され、縄文時代の遺構はかなり遺存状態が悪い。

本地点の調査にあたっては、前年度(平成3年度)の調査結果から複数の層滑り面の存在が予想されたことと、倒木痕から縄文草創期の尖頭器が検出されていたこともあり、より古でといる時代の調査の必要性を感じていため、調査区ほぼ中央に掘られた撹乱を感じため、調査区ほぼ中央に掘られた撹乱を加りため、調査区はび先土器時代調査のトレカを上をした。ここから剥片が集中して検出されるにいたり、縄文時代面調査終了後2×5mのトラとして設定し直した。これを掘り下げるレインチとして設定し直した。これを掘り下げるイバーなどが出土しはじめた。遺物が特に集中なる箇所がさらに南へ広がる可能性があるため2

㎡を拡幅。最終的に12㎡を調査した。深さは、 湧水と岩盤状になった鉄分層のため2mまでと せざるを得なかった。

### <遺構・遺物>

遺物はすべてB1層中から出土しており、相 模野編年の第IV期に相当するものである。まだ 整理途中であるが、現時点で確認されているも のとしてナイフ形石器10点、彫器1点、エンド・ スクレイパー1点がある。

ナイフ形石器  $(1 \sim 5)$  は、いずれも  $3 \sim 4$  cm程度の小形のもので 1 は硬質頁岩、 2 は細粒凝灰岩、  $3 \cdot 4$  は安山岩、 5 は黒曜石とさまざまな石材が使用されている。

彫器 (6) は角柱状を呈し、小坂型彫器の範疇でとらえられるものである。石材は赤色の頁岩で、同様の石材による剥片が周辺からまとまって出土している。

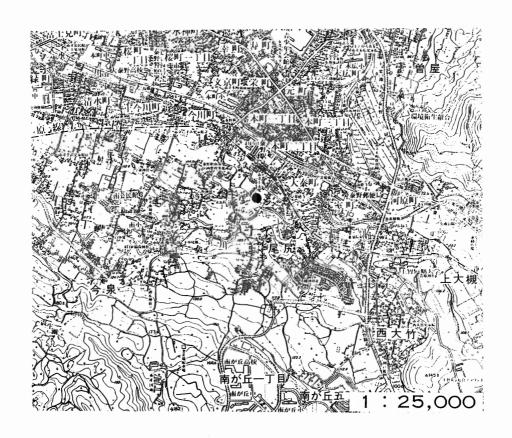
エンド・スクレイパー (7) は刃部周辺の断 片で、石材は頁岩である。

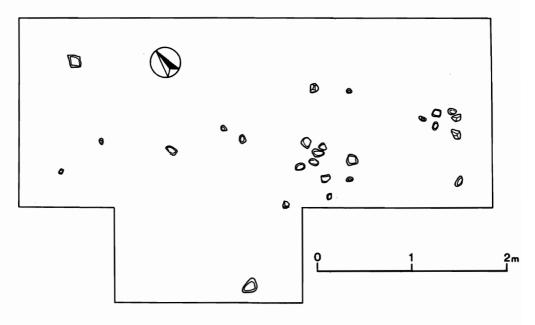
これらの他に使用痕ある剥片もいくつか確認されている。8は細石刃に酷似する剥片で、石材は黒曜石である。また、黒曜石製の尖頭器の調整剥片と思われるものが1点出土している。

礫群は調査区の南側で検出されており、火を 受けた拳大の河原石によって構成されている。 9. ま と め

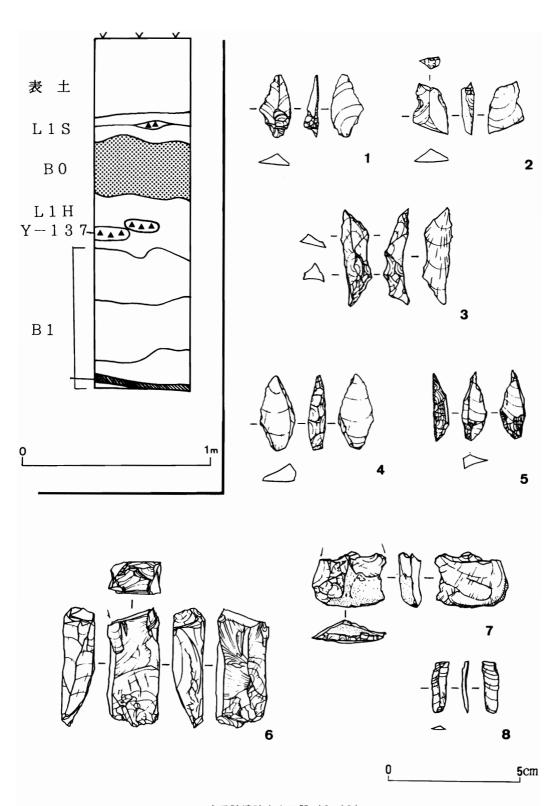
今回の調査により、秦野盆地内ではじめて先 土器時代の遺物が検出された。しかも12㎡とい う限られたわずかな面積の調査であったにもか かわらず、約300点にのほる遺物が検出され、 近年ようやく資料が増えつつある西相模の先土 器時代研究の一助になると考えられる。

また、本地点の調査後隣接地点にトレンチを入れたところ、L1H層下部から安山岩製の尖頭器が1点出土しており、前述した草創期の尖頭器とあわせて、空間的・時間的にさらに広がりを持つ遺跡であることが予想できる。今後の発掘調査と資料整理が待たれるところである。





**礫群平面図** (1/40)



太岳院遺跡出土石器 (2/3)

### 《記 念 公 演》

## 「中世城館遺跡について」 -県内の調査事例を中心に-

東海大学教授 石丸 熙

- 2 城と館をめぐる近年の研究動向
- (1) タチかヤカタか

(2) 方形館のイメージチェンヂ

(3) 中世都市論と城・館

- 3 城館遺跡の調査事例から
- (1) 都市鎌倉の館

(2) 早川城

(3) 真 田 城

(4) 波多野城

4 おわりに -今後の課題-

### 5. 海老名市相模国分寺塔跡

須田 誠

- 所在地海老名市国分南一丁目 (旧地名:国分字宿)
- 2. **調査主体者** 相模国分寺遺跡調査会 会長亀井英一(市教育長)
- 3. 調查担当者 須田誠 (市教育委員会)
- 4.調査目的

国指定史跡相模国分寺跡環境整備事業に伴う 確認調査。

5. 調査期間

1 9 9 2.9.2.~1 1.1 8.

### 6. 遺跡の立地

相模国分寺跡は、相模平野を望む中津原台地上に立地する奈良~平安時代の寺院跡である。僧寺跡・尼寺跡は南北に並立し、心心距離で約600mである。僧寺跡の東側は丘陵裾部が迫っり、尼寺跡の西側は小支谷が入り、立地的には中津原台地の南端の平坦部が、最も狭まった部分に占地している。

### 7. 過去の調査

僧寺跡の一部は、1920 (大正10) 年に国指定 史跡となって保存措置がとられているため、周 辺の市街化が進むなかにあって金堂跡・講堂跡・ 塔跡の礎石が比較的よく残っている。

明治〜大正頃に郷土史家中山毎吉が発掘を行 なったらしいが、資料は残されておらず、詳細 は不明である。

史跡地内の本格的な発掘調査は、1965・1966 (昭和40・41) 年度の国・県・町の確認調査 (史跡地第1次) と平成元年度から海老名市が 進めている「史跡相模国分寺跡環境整備事業」 に伴う確認調査がある。後者は、1991 (平成3) 年度から1994 (平成6) 年度まで実施する予定 で、初年度の調査 (史跡地第2次) では、僧房 の西端、掘込地業1基 (推定経蔵跡) が出土し ている。

今回の調査は、史跡整備に伴う確認調査の2 年度目にあたり、塔跡の復原修理工事に必要な 資料を得るとともに遺構を保護するために砂で 埋め戻すことを目的として実施した。

#### 8. 調査成果

塔跡は、第1次調査で基壇の西半分を除く約7割が発掘されている。

塔の礎石は、幕末までは心礎を含む17個すべてが遺存していたらしい。しかし、心礎は明治初期に持ち出され石灯篭にされたほか、忠魂碑の土台石や庭石などとして持ち出されたりしたために、四天柱3個、側柱7個の計10個しか現存していない(写真8)。

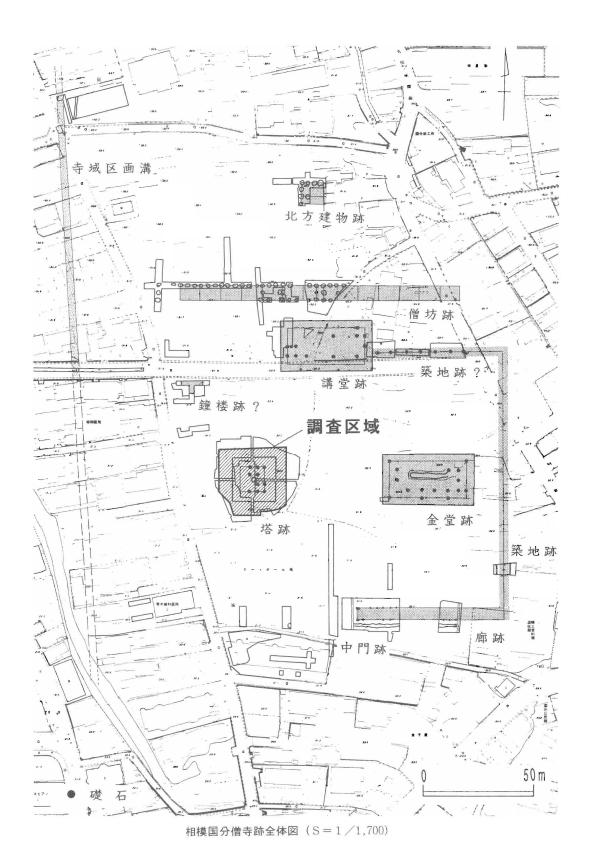
現存する礎石には柱座などは作られていないが、四天柱の礎石3個と側柱の礎石のうち隅の二つの礎石が他の礎石に比べ大きく、とくに加重のかかる部分には大きな石を使うなどの選別を行なっている可能性はある。

前述のように心礎はすでに抜き取られているが、その抜き取り穴を調査したところ、心礎の一部が割れて残っていた(写真7)。この残存部分と抜き取り穴から心礎の大きさは長径2.5 m、短径2 m程と推定される。

基壇外装は、東西南辺が壇上積みで、地覆石の一部が遺存している(写真3)。北辺の基壇外装は乱石積みで(写真4)、北辺は東西辺と直交しないことから再建期と推定されている。

基壇の周辺では、A~Cの3回の整地面が出土している。A面は、長径約7~8cmの石を幅1.5mで比較的隙間なく敷いている(写真5)。B面も同じ大きさの石を使っているが、A面に比べかなり散漫にしか敷かれず、石の間に褐色土を混入させている(写真6)。C面は、明褐色土で10~20cm盛土している。これらのことから少なくとも創建以後1回ないし2回の修理が行なわれたと推定される。

出土品は、大半が瓦で、いずれも小破片であった。瓦の他には、青銅製の水煙の破片が6点ほど出土し、その内1点は整地層の中から出土したため一部に金メッキが残っているほど遺存状態が良好であった。



-17-



写真1 塔跡全景(南から)



写真2 塔礎石(東南から)



写真 3 壇上積基壇外装(地覆石)



写真 4 乱石積基壇外装(北辺)



写真5 基壇外周石敷(A面)

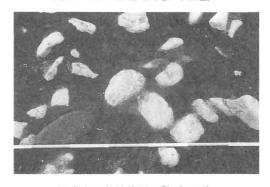


写真6 基壇外周石敷(B面)



写真7 塔心礎出土状況



写真8 調査区全景(右が北)

### 6. 三浦市新井城址

武藤 康弘

- 1. 所 在 地 神奈川県三浦市三崎町小網代
- 2. 調查主体 東京大学埋蔵文化財調査室
- 3. 調査担当者 寺島孝一・武藤康弘
- 4. 調查期間 平成4年7月20日~9月25日
- 5. 調 **査 目 的** 理学部附属臨海実験所の新研 究棟建設に関わる事前調査
- 6. 調査面積 1,670㎡(約200㎡を追加調査)

### 7. 遺跡の位置

遺跡は相模湾に面した油壷の半島の突端、標高約26mの海岸段丘上に位置している。調査地点は、かって赤星直忠氏が『三浦半島城郭史』のなかで戦国時代の武将三浦義同の居住新井城の本丸と措定した地区に相当する。ここには明治30年に臨海実験所の学生寄宿舎が建設され、昭和51年まで使用されていた。その寄宿舎も北側に一棟残して取り壊され、現状では一面に芝生が植えられた平坦地となっている。

### 8. 検出された遺構と遺物

発掘調査の結果、調査地点は明治時代の寄宿舎の建設ならびに昭和50年代の寄宿舎の解体によって撹乱をうけているものの、多くの遺構が当時の生活面である黒褐色土の上面から検出された。主な遺構としては、大形掘立柱建物跡1基、大形竪穴状遺構1基、溝状遺構2基、土坑3基、掘立柱穴列3基、円形土坑1基が検出された。また、これらの遺構と包含層から遺物収納箱11箱分の陶磁器類が出土した。

主要遺構の概要は以下のとおりである。

SB05 調査区東側に位置する長方形の大形 掘立柱建物跡で、規模は長軸1800㎝、短軸600 ㎝をはかり、22本の柱穴によって構成される。柱穴規模にはバラツキがあり、掘り方径が70㎝深さが80㎝をこえる大形の柱穴から掘り方径が70㎝深さが50㎝ほどの浅い柱穴が同一軸上に配列されている。柱穴間隔は約180㎝である。また、西側にも塀の基礎と推定される小形の柱穴列が存在する。遺構中央部北よりの小ピットから灰と鞴の羽口が出土した。

SB04 調査区西端に位置する長方形の大形

竪穴状遺構である。本遺構は切り合い関係によっ て新旧2時期に区分される。先ずはじめに長軸 約900cm、短軸約500cm、深さ約80cmの隅丸長方 形の大形竪穴状遺構が構築される。この遺構が 黒色土で埋没した後に、やや北側に位置をかえ て長軸約900cm、短軸約250cm、深さ約60cmの隅 丸長方形の竪穴状遺構とそれを取り囲むように 18基の柱穴が配列される。柱穴は掘り方径約70 cm深さ約70cmで、柱穴間隔は約180cmである。 西側には布掘で連結し一方に礎石が据えられた 2基の柱穴があり、竪穴状遺構の長軸と重なる ことから入口の施設と推定される。竪穴状遺構 の内部には長軸に沿って棟持ち柱の小形柱穴が 13基配列されている。また、竪穴状遺構の底面 には約20cmの厚さで浜砂が敷かれている。浜砂 層の上に堆積した埋土は炭化物や焼けた壁土等 を多量に含む焼土となっている。

SD01 調査区北側に位置する溝状遺構である。幅 220cm、深さは最深部で確認面から60cm、断面形は逆台形である。空堀を構成する溝と推定されるが、平面形はL字形に屈曲して、両端が緩やかに立ち上がる構造となっている。

SD02 調査区東端に位置する溝状遺構である。幅220cm、深さ70cmで断面形は逆台形を呈する。SD01と共に空堀を構成すると考えられる。

SK08 調査区北側に位置する土坑である。深さは約590cmで底面は東京パミス上面に位置する。平面形は開口部で100cm×200cmの長方形、中部では150cm×150cmの隅丸方形、底部では直径約100cmの円形となっており、縦断面形は長大な袋状を呈する。開口部から約400cm下で人骨を大量に含む土層が約40cmの厚さで堆積していた。人骨は遺物収納箱で20箱分出土した。大部分は大腿骨等の四肢骨で占められ、関節も分離しており、末節骨等も出土していないことから、城内の合戦場に散乱した人骨を土坑内に投棄したものと推定される。また、馬骨も一部含まれている。

SK16 調査区西側に位置する土坑である。 深さは約530cmで底面のやや上方に三色旗軽石 層が位置している。平面形は開口部で130cm× 300cmの長方形を、底部は100cm×200cmの隅丸 長方形を呈している。縦断面形は開口部から約 230cm下で括れその下で大きく袋状に広がる形 状となっている。

SK20 調査区北側、SK08に隣接した土坑。深さは約230cmで、開口部と底部の形状は一辺180cmの隅丸方形となっている。

SK10 調査区中央に位置する円形の土坑で、直径約200cm、深さ約100cmの規模をもつ。断面形は上端部がやや括れた摺り鉢状を呈し、内部からは落ち込んだ状態で砂岩の切石が2点出土した。埋土の堆積状態や土坑の形状から植栽痕と推定される。

SB03 調査区東側に位置する掘立柱穴列である。掘り方径約70㎝深さ約70㎝の柱穴5基が約180㎝間隔で配列されている。また、東側にも同様の柱穴が溝状遺構を囲むように不規則に配列されているが、本体の柱穴配列とは対応していない。両者ともに塀状の施設の基礎遺構と推定される。

SB18 調査区中央、SB05大形掘立柱建物跡の北西に位置する掘立柱穴列。控え柱穴をもつことから塀等の基礎遺構と推定される。

**SB21** 調査区中央、SB05大形掘立柱建物跡に隣接する掘立柱穴列。塀の基礎遺構と推定される。

この他に掘立柱穴が調査区西部で多数検出されているが、西端部の海岸側の土塁に隣接した部分で、若干配列のたどれるものが存在するほかは、不規則な配列のものが多く現在も対応関係を検討中である。また、海岸側の土塁は断ち割りをいれて盛土の堆積状況を検討した結果、当時の地表面である黒褐色土の上に30cm以上の褐色土が積み上げられていることが判明した。現状では侵食作用によって低平にみえる土塁も本来は盛土によって形成されていたことが明らかになった。

一方、これらの遺構および包含層から出土した遺物の総量は遺物収納箱11箱分である。約95%が16世紀の陶磁器であるが、それ以外の時期

の遺物も少量出土した。

室町時代の出土遺物で最も多いのはカラワケ である。胎土は在地のもので、器壁が厚く、ロ クロによる器面調整をおこない、底部は回転糸 切りによって切り離している。口径に対して底 径が比較的大きい独特の形状で、三浦半島の当 該時期の遺跡から出土するものと同様の形態で ある。口唇部に媒痕が顕著な例もある。また、 同様な胎土の土製品として管状土錘が多量に出 土している。次に出土量の多いのは瀬戸窯の大 窯の時期の陶器類である。器種は灰釉の小皿、 摺鉢、天目茶碗等が主体となり、年代は16世紀 前半に位置付けられる。また、常滑窯の大甕の 破片も出土している。この他に、伊勢系の土鍋 と推定される淡褐色の胎土で薄い造りの土器片 や、中国明代の青磁・青花磁器等の貿易陶磁も 少量出土している。

金属製品としては、SB04大形竪穴状遺構の埋土の焼土層から多量の鉄釘が、SB05大形掘立柱建物跡の柱穴と包含層から古銭が出土している。

### 9. ま と め

今回の発掘調査では非常に良好な状態で保存 されていた戦国時代の城郭址の本丸を調査し、 極めて貴重な成果を得ることができた。これは 次のようにまとめられる。

- ①土塁で囲まれた曲輪内で複雑に配置された空 堀の存在を確認することができた。
- ②曲輪内で掘立柱の大形建物跡および大形竪穴 状遺構等の建築遺構群を確認することができた。 なかでもSB04大形竪穴状遺構は底面に浜砂 を敷つめた他に例をみない特殊な遺構である。
- ③SK08土坑に投棄された大量の人骨やSB04大形竪穴状遺構の埋土の焼土は、出土遺物の年代から判断して『北条五代記』等の古文献に記された合戦記事を裏付ける貴重な資料といえる。

このように、保存の良好な城跡の調査で多くの建築遺構が検出され、しかも文献の合戦記事が考古学的に裏付けられたという点で今回の調査は貴重な例といえる。今後は遺構の変遷をより細分して文献資料に記された明応3年(1494)と永正(1512)から永正13年(1516)の2回の



図1 新井城址遺構配置図



図2 SB04大形竪穴状遺構全景

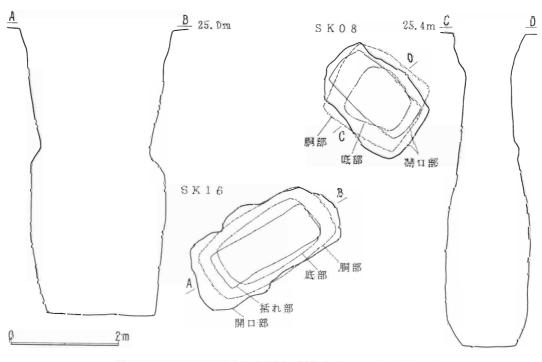


図3 SK08、SK16土坑平面図およびエレベーション図

### 7. 平塚市山王A遺跡

日野 一郎・上原 正人

- 所在地 平塚市四之宮字山王52番地の
  1、53番地
- 2. 調**査主体** 平塚市遺跡調査会 (会長 日野一郎)
- 3. 調査担当者 上原正人
- 4. 調査目的 共同住宅建設に伴う事前調査
- 5. 調査期間 平成4年5月7日~8月5日
- 6. 調査面積 644.75㎡
- 7. 遺跡の立地

山王A遺跡はJR平塚駅の2.6kmほど北方に位置している。遺跡は砂丘上に立地しており、標高は地表面で約9.5mである。この砂丘は平塚市にある十数列の砂丘列の北から数えて4列目ほどにあたり、南側の列とは通称谷川と呼ばれる砂丘間凹地で隔てられている。第4地点にあたる本地点は、この砂丘の頂部から緩やかに南へ傾斜する位置にある。

周辺には東に六ノ域遺跡や高林寺遺跡など大住国府の所在地といわれている遺跡が存在し、南には「国厨」の墨書土器を出土した稲荷前A遺跡や、「郡厨」の墨書土器を出土した天神前遺跡、銅製の海老錠牡金具を出土した神明久保遺跡とも近い位置にある。いずれの遺跡とも500mほどの範囲内である。

### 8. 調査の概要

平塚市内の砂州・砂丘上に立地する遺跡に関しては、共通の基本土層がほぼ確立し、記号化されている。本遺跡もこの基本土層を基に調査を行なっている。古代、近世の各遺構の確認は茶褐色砂質土(Ⅲb)層上面で行なった。また、近世の遺構の覆土には宝永火山灰が混入しており、寛永通寳が溝状遺構から出土している。検出した遺構と遺物は以下のとおりである。

### 〈遺構〉

### 古墳時代後期~平安時代

竪穴住居址9軒、掘立柱建物址8棟、井戸址1基、土壙4基、溝状遺構10条、道路状遺構1条、土壙墓1基、ピット314本

### 近世以降



図1 遺跡位置図

溝状遺構6条、集石1基

### 〈遺物〉

縄文土器(中期)、土師器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、鉄製品、銅滓、佐波理の 匙、近世の陶磁器、寛永通寳

合計 コンテナ8箱

調査面積や検出遺構からすると出土遺物の量が少なかったが、これは遺構の主体が掘立柱建物址であることによるものと思われる。つぎに 古墳~平安時代の主な遺構と遺物を概述する。

### 竪穴住居址

竪穴住居址で完掘できたのは2~4号竪穴住居址である。1号、2号、4号、9号竪穴住居址は住居址の南東隅に竈を施設するもので、9号竪穴住居址からは、羽釜・土製竈を含む土師器や灰釉陶器などが出土している。10世紀後半~11世紀にかけての構築と思われる。5号竪穴住居址は8世紀後半の遺物を出土した遺構で、掘立柱建物址と併存すると思われる住居址である。古墳時代後期に属するのは6~8号竪穴住居址で調査区の北寄りに偏って構築される。

### 掘立柱建物址

掘立柱建物址は調査時点で7棟確認し、図面

整理段階で1棟追加したため現状では8棟としておく。調査区のほぼ全域にピット状の掘込みが検出され建物址として正確とらえることは難しいが、覆土および掘り方の規模から建物址と判断している。また、その他の単独のピットと思われたものが掘立柱建物址の柱穴となる可能性もある。概して調査区の中央より東側に柱穴掘り方の大きな遺構が立地している。

1号掘立柱建物址は全掘できた遺構で4間 (10.1m) × 3間 (6.5m) の規模をもつ大型の 掘立柱建物址である。柱間寸法は柱痕の確認さ れたP5からP8までの間で2.3m~1.9mであ る。南北棟で棟方向はほぼ真北に近い。各柱穴 の掘り方は最も大きいP13で1.8×1.5mを測り、 各柱穴の平面形態は方形か楕円形である。P9 の掘り方上層から佐波理の匙が出土した。匙は 身の凹面を上にむけ、45度ほどの角度で柄を立 てた状態であった。匙の下に敷かれていた十数 片の須恵器の破片はほとんどが内面を上にして 1~3重に重複していた。少なくとも4個体の 破片が寄せ集められていた。4号掘立柱建物址 は3、4号竪穴住居址と1号掘立柱建物址に切 られる。東西棟で3間(7.1m)×3間(6.0m) の西側に廂をもつ。1号と同様に掘り方の大き な柱穴で柱間寸法も大差ない。5号掘立柱建物 址からは8世紀中葉に属する須恵器坏を出土し ている。

### 井戸址・溝状遺構・道路状遺構

1号、7号掘立柱建物址と重複して井戸址を 検出している。井戸本体は平面形態が方形を呈 しており、底と思われる部分には褐鉄帯(鉄錆) が円形に堆積しているのが観察された。曲物の 痕跡かと思われる。出土遺物により11世紀に使 用していたと思われる。

溝状遺構は南北に流路をもつものと東西にもつものとがある。4号溝状遺構は1号、4号、7号掘立柱建物址と1号井戸址を切っている。その他の溝状遺構も宝永火山灰を覆土とする溝と9世紀代の遺物を出土している9号を除けばほぼ同時代の遺構と思われる。区画溝としての積極的な根拠をもつ溝状遺構はない。

道路状遺構は暗褐色土が硬化したもので、5 号溝状遺構の南側に平行し、5号溝状遺構の北 端とほぼ同様の位置で途切れている。この溝状 遺構に付随するものと思われる。上記の井戸、 溝、道路状遺構とも1、2、4号竪穴住居址と ほぼ同時代の遺構でこの時期には、大型の掘立 柱建物址はみられない。

#### 佐波理の匙

1号掘立柱建物址から出土した佐波理の匙は出土時点での計測で全長26cm、柄の長さ19cm、重さ37.8gを測る。正倉院御物の木葉形の匙面をもつものと形態、法量の点で類似しており、またその材質も銅と錫の合金(国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に依頼し蛍光X線分析を行なった)で佐波理製として間違いないとおもわれる。また、匙の下に敷かれていた須恵器は8世紀代の遺物であると考えられる。

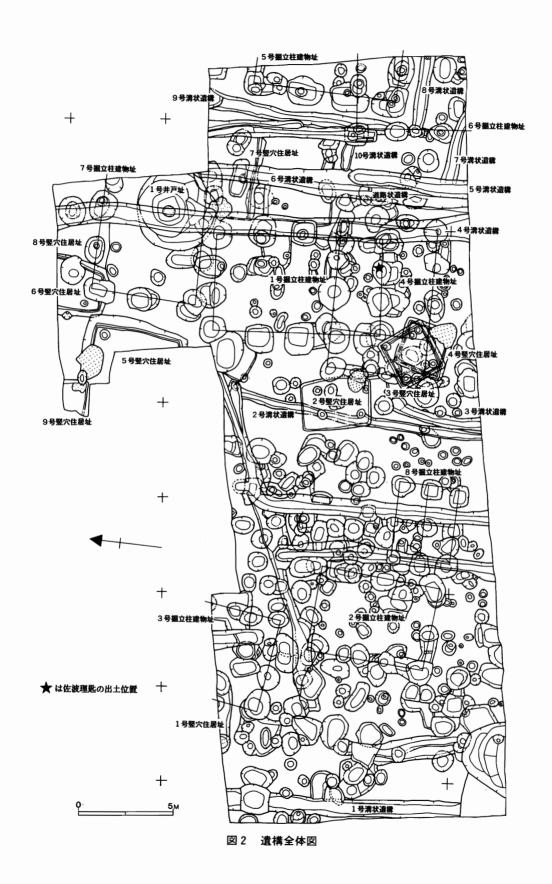
### 9. ま と め

本遺跡で出土した佐波理の匙は、その出土状態から何らかの意図により埋納されていたと考えられる。その場合1号掘立柱建物址はどのような機能をもつ建物であったのだろうか。全国の佐波理の匙の出土遺跡は主に寺院址か官衙関連遺跡である。本遺跡では寺院址に関連する遺構は検出していないことから、現段階では官衙に関連する遺構と考えている。

平塚市四之宮周辺は相模国府推定地とされる 地域である。従来、官衙の中心域は高林寺遺跡 第7地点での区画溝の検出や調査による出土遺 物の量、種類の充実などから高林寺遺跡周辺と 考えられていた。しかし、近年の調査で山王A 遺跡の北に隣接する七ノ域遺跡やその周辺で大 型の掘立柱建物址や区画溝が検出されており、 本遺跡を含めその周辺域の成果によって官衙の 中心域を再検討する時期に来ているといえる。



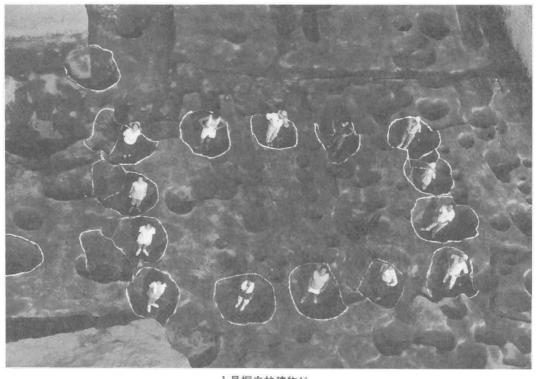
佐波理匙出土状況



-25-



山王A遺跡全景(北より)



1 号掘立柱建物址

### 8. 横浜市観福寺北遺跡 (関耕地地区)

浅川 利一・田村 良照

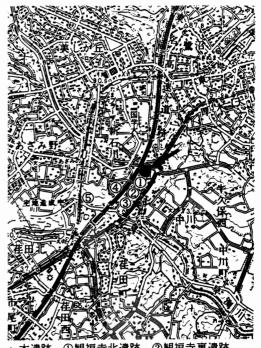
- 1. 所 在 地 横浜市緑区荏田町字開耕地
- 2.調査主体 観福寺北遺跡発掘調査団 (団長 浅川利一)
- 3. 調査担当者 田村良照・迫 和幸 小山裕之・上村光二
- 4. 調 査 目 的 (仮称)荏田計算センター建 設及び農地造成工事に伴う事 前調査
- 5. 調査期間 試掘調査 平成3年3月20日 ~同年3年6月20日 本格調査 平成3年10月17日 ~平成5年3月5日
- 6. 調査面積 約10,000㎡

### 7. 遺跡の立地

本遺跡は東急田園都市線あざみ野駅の東南東 約700mに位置する。本地域は下末吉台地が多 摩丘陵の南端と接するところで、鶴見川と早淵 川およびその支流の小河川によって複雑に開析 された丘陵地形を呈している。遺跡はあざみ野 駅周辺から南東に向かって延びる丘陵先端部に 立地し、この先端部は二つの小支丘に分岐して、 その北東側小支丘上に本遺跡は位置する。また 眼下に大きく蛇行する早淵川の流れを臨むこと ができる。この丘陵のほぼ全域からは弥生・古 墳時代を中心とする大規模な遺跡群が確認され ており、巨視的には本遺跡もその一部と考えら れる。具体的には、本遺跡の南に接して観福寺 北遺跡(1989. 平子・鹿島)、さらに南側に観 福寺裏遺跡(1986. 北原・斉藤)が所在し、こ の2遺跡は相互の位置関係とその内容から見て 本来同一遺跡と考えられる。尚、遺跡名の混乱 を回避するため、既報告の観福寺北遺跡に対し て本遺跡は観福寺北遺跡(関耕地地区)と命名 して区別したことを明記しておきたい。

### 8. 調査の概要

本遺跡は横浜市文化財地図No.120・123 遺跡に該当し、縄文時代から近世にいたる各時代の遺物散布地としてマークされている。また周辺遺跡の状況から弥生時代集落の主要部分が存



←本遺跡 ①観福寺北遺跡 ②観福寺裏遺跡③虚空蔵山遺跡 ④釈迦堂遺跡 ⑤赤田横穴墓群

**図1 遺跡位置図**(1:50,000) 在すると予想されていた。

調査の結果、調査区全域に弥生時代中後期の住居址が濃密に分布する市域でも有数の集落遺跡であることが判明し、また、調査区東側の№ 12 遺跡に於いても墳丘が遺存する未確認の前期古墳群を発見した。そのほか、平安時代及び中近世の遺構が散漫に分布している。それらを各時代ごとに整理するとおよそ以下のような内容となる。

### <遺構>

弥生時代 竪穴住居址99軒、環濠 (V字溝) 3条、方形周溝墓2基、土壙3基

古墳時代 竪穴住居址1軒、古墳5基、墓壙 2基、土壙6基

平安時代 竪穴住居址 5 軒、溝状遺構 1 条中 近 世 地下式坑 2 基

時期不明 竪穴址1基、円形柱穴列1基、土 塘3基 **弥生時代** 中期の集落はいわゆる環濠集落の形態を呈するもので、調査区全域にそれほど偏在することなく約30軒の住居址が分布し、その間を縫うように3条の環濠(V字溝)が走る。環 は1号→2号の順番に掘られたことが判明し、さらに住居址の重複を勘案すると2~3期にわたらに住居址の重複を勘案すると2~3期にわたって営まれた集落であると判断される。また 谷を挟んで東西の丘陵上に方形周溝墓が各1基つくられており、集落変遷を検討する上で示唆的な存在である。特に注目される遺構として、98号住は貯蔵穴からの粘土塊の出土と、ガラを入れた壺が発見され、土器製作住居址と見られる。遺物では、8号住から鉄斧3点、95号住から磨製石鏃1点が出土した。

後期の住居址は調査区の西側に偏在する傾向 が窺え、住居址相互の重複は極めて激しい。確 実なところで60軒が本期に帰属し、中期の住居 址軒数の約2倍に達する。こうした在り方から 見て、長期間継続的に営まれた集落址であると 考えられる。ここで注目されるのは、本期の大 多数の住居址から櫛描文系の朝光寺原式土器が 出土し、加えて竪穴についても同型式に特有の 形態・構造が認められる点である。本遺跡の南 西約 2.6kmには標式遺跡の朝光寺原遺跡が位置 し、周辺には多数の集落が調査されて、いわば 朝光寺原式土器の本拠地の観がある地域と言え るが、管見では現在のところ本遺跡が最大規模 の集落址であると見られる。竪穴住居址の規模 については、長軸10m超のものが複数存在する 中で、6号住は15m×10m (床面積約150㎡) と卓越した規模を誇る。この住居址からは銅釧 1点が出土し、規模とあわせて、集落の中心的 存在であったことを示唆しているようにも見受 けられる。

古墳時代 調査区南東側に前期の方墳4基とそれらに後続する円墳1基が古墳群を形成している。この区域は、早淵川とその氾濫原を眼下に臨む丘陵先端部にあたり、地目は山林・竹林であったため、5基のうち4基は墳丘をよく遺していた。まず前期古墳の1~3号墳と5号墳について見ると、4基は互いに近接した位置にあり、2号墳と3号墳は周溝が一部重複している。最も遺存状態の良好な1号墳を例に挙げれば、

平面形は内縁で一辺約12mの方形を呈し、周溝 は南隅一箇所が途切れ、幅は最大3m強を測る。 墳丘はまず、黒色土で層厚40~50cmの基部とな る層を堅固に版築し、その上にローム主体の混 合土を積土する、という手順で築成され、1.4 m程の墳丘高を有している。5号墳は周溝だけ の検出となったが、2号墳とともにほぼ同様の 規模・構造であったと見られ、3号墳はそれら よりは一回り大きい。埋葬施設は各古墳に1~ 3箇所検出され、2号墳の主体部からは鉄斧1 出土の土器から4世紀後半の築造が想定される。 つぎに4号墳は、竪穴式の埋葬施設を2箇所に もつ円墳である。周溝中層より鬼高式の坏身1 点(6世紀後半)が出土したが、本周溝と重複 して北東側に同期の墓壙群が形成されているた めこの土器はそれらからの流入した可能性が高 く、埋葬施設から見ても5世紀代に遡ると考え られる。住居址は59号住1軒だけが本期に属し、 隣接遺跡にも検出例はない。つまり、古墳時代 になるとこの丘陵は墓域化し、集落の主体はほ かへ移動したと見られる。

平安時代 10世紀頃の住居址が散漫に分布する。 他には、調査区中央の谷部分に性格不明の溝状 遺構が設けられている。

中近世 調査区北東側に地下式坑2基が検出された。このうち1号地下式坑は、竪坑を一旦埋め戻して墓壙に転用した形跡が認められた。

### 9. ま と め

弥生時代から中近世まで数多くの資料を得たが、特に弥生時代と古墳時代の成果は注目る弥生中期の拠点集落が点在し、小地域圏に於ける。早淵川流域には大塚遺跡をはじめとする弥生中期の拠点集落が点在し、小地域圏に於ける。本遺野待されるところである。弥生後集落の成果は期待されるところである。弥生後集落の世界である。集落研究とともなろう。に、稲荷前古墳群や虚空蔵山古墳とともに、発生期の古墳とともに、発生期の古墳として、弥生から古墳時で、きわめて興味深い存在であると言えよう。

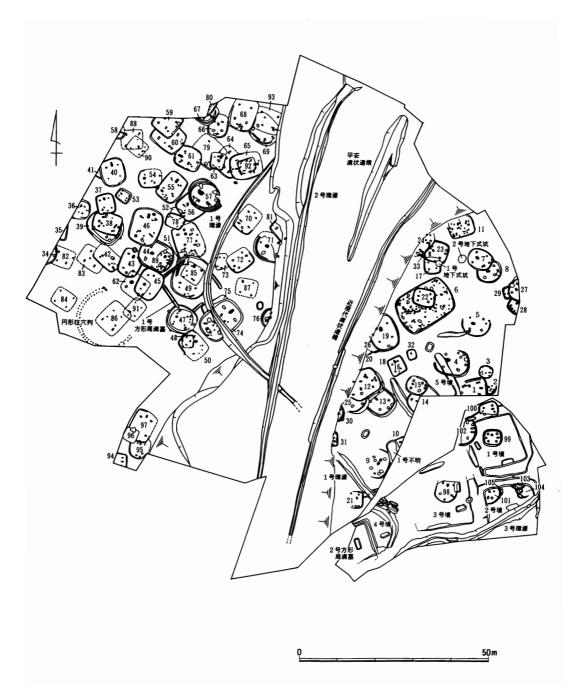


図 2 遺構配置図 (1:1,000)



写真1 遺跡全景(上空より)

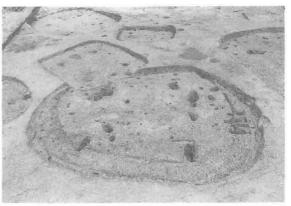


写真 4 37号~39号住居址

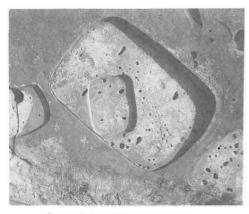


写真2 6号・22号住居址(上空より)



写真5 古遺群及び住居址群(上空より)



写真 3 1号環濠出土遺物



写真6 (奥から) 2号~4号古墳

### 9. 横須賀市小荷谷遺跡

中三川 昇

**1. 所 在 地** 神奈川県横須賀市鶴居 3 丁目 660番地

2. 調査主体者 横須賀市教育委員会

3. 調査担当者 中三川 昇

**4. 調査目的** 老人福祉センター建設に伴う 事前調査

**5. 調査期間** 平成 4 年12月 1 日~平成 5 年 1 月30日

6. 調査面積 約500㎡

### 7. 遺跡の立地

東京湾の最も狭まる浦賀水道西岸の鴨居湾に面する標高5mほどの砂丘上に立地している。現在の海岸までの距離は約120mを測る。古来より東京湾渡海の拠点であったと言われている走水湾からは約3kmほど南に位置している。

正倉院文書の『相模國天平七年封戸祖交易帳』 に従三位山形女王の食封として「御浦郡走水郷 伍拾戸」と記されているが、本遺跡の地理的な 位置からみて、遺跡の立地する鴨居地域がこの 走水郷に含まれていた可能性は極めて高いもの と考えられる。なお、対岸は千葉県(旧上総国) 富津市で、富津市街まで約12km、富津岬までは 約8kmほどの距離を測る。

また、本遺跡の位置する鴨居湾周辺には、海 浜部を中心に弥生時代中期から古墳時代初頭の 集落跡と古墳時代後期の集落跡の発見された鴨 居上の台遺跡、古墳時代後期の鳥ケ崎横穴群、 鳥ケ崎洞穴、鴨居八幡社貝塚、古墳時代後期か ら奈良時代前半頃にかけて営まれた、たたら浜 横穴群などが所在している。

### 8. 遺跡の概要

#### <発見遺構>

古墳時代前期の土坑1基、溝状遺構1条、古墳時代後期末~奈良時代前葉の掘立柱建物址7棟、竪穴状遺構1基、柱穴列7条、土坑1基、その他のピット約160基、 平安時代の井戸址1基などと近世の石組基壇1か所が発見された。これらの遺構のなかでまず注目されるのは、古墳時代後期末~奈良時代前葉にかけての掘立柱

建物址を中心とした遺構群である。

それぞれの覆土からは古墳時代前期の土器を 混じえながら、古墳時代後期末葉頃を中心とし た土師器、須恵器片が多数出土している。須恵 器に関しては明確に8世紀代以降と考えられる ものは皆無であった。遺構外からは奈良時代中 葉から平安時代にかけての土師器も出土してい るが、これらをまったく混じえていない点から みて、この遺構群の構築時期は8世紀代初頭を 大きく降るものではないと考えられる。また、 この遺構群は主軸方向の相違と重複関係からみ て概ね2群(4小期)ほどの変遷が考えられ、 出土遺物の状況とも合わせ、遺構群の始期が7 世紀代に入ることは確実であろう。

上記の2群を仮にA群、B群として、その配置をみると、両群とも調査区のほぼ中央部分に位置する柱穴列(SA02~04)付近を境に、その東側部分に倉庫的な建物址が位置し、西側部分には柱間が2×4間以上の建物址(SB05)や布堀りの建物址(SB06)など、比較的大規模な建物址や特異な建物址が位置している。

なお、重複関係からみると、両群はA群から B群へと変遷している。この点は建物の屋根を 押さえていたと思われる礫が、片付けられるこ となくA群遺構の周辺部で集中して出土してい ることからも言える。

平安時代の遺構である井戸址(SE01)は横板 井篭組井戸で、2段分の井戸枠が遺存していた。 <出土遺物>

弥生時代中期 宮ノ台式土器1点(壷)

古墳時代前期 土師器、管状土錘、有頭石錘 古墳時代中期 土師器

古墳時代後期~奈良時代前葉

土師器、須恵器、石製模造品 (剣2、有孔円板1)、金銅 製品、鉄製品、(鉄鏃、刀子、 他)砥石、礫、柱材

平安時代中葉 土師器、灰釉陶器、緑釉陶器 井戸枠材、ヒョウタン? 中世以降 白磁瓶類、唐津産陶器、管状 土錘、寛永通宝、鉄釘

その他 コブダイ下顎骨、イルカ脊椎 骨、獣骨類など

以上の出土遺物の中では古墳時代後期の遺物 包含層より出土した金属製品と平安時代の井戸 枠に使用された板材が注目される。

金属製品は中央部にハート型の透しを持ち、 上部の左右2か所に長方形の孔が穿たれ、右側 の孔には上部から巻き込むような形で別材が遺 存していた。また、透し部のやや上方の左右が 半円形に抉られている。各部の縁辺部は一条の 沈線で縁取りがなされ、透し部の上部には縦線 で区画された斜格子文が、透し部の左右からに 部にかけては短い縦線が施されている。 現存 部にかけては短い縦線が施されていない。 現存 ま面のみで、裏面には施されていない。 現存 お、裏面が何らかの物質に付着していた痕 お、裏面が何らかの物質に付着していたみて何 らかの垂飾と考えられる。

井戸枠の板材は下段4枚がほぼ完全に遺存し ていた。いずれも最大で5.5㎝前後の厚さがあ る。幅は33cm前後と63cm前後のものが各2枚で、 1 mから1.2mほどの長さに手斧状の工具で 切 断されている。一見すると、いずれも板目取り の板材のように思われるが、幅の狭い2枚はわ ずかに断面が湾曲している。この2枚は裏面に 貫通しない縄掛け穴状の穿孔が70㎝ほどの間隔 で穿たれ、その上部には横長のほぞ穴状の穿孔 がなされている。幅のある2枚の板材の内の1 枚は下端部近くに上下が対になった裏面まで貫 通する穿孔がなされ、上縁部には摩滅した抉り 部分が認められる。もう1枚は上下対の穿孔は 認められないが、下位に横長の穿孔があり、上 縁部にはやはり摩滅した抉りが認められる。こ れらの2枚は断面がほとんど湾曲しておらず、 文字どおりの板材である。いずれの材も井戸枠 としては不必要な加工が多くみられ、転用材で あることは明らかである。建築部材としてみて もやや不自然な印象を受ける材である。

また、古墳時代後期から平安時代にかけての 出土遺物の全体的な傾向として、海浜部の遺跡 でありながら漁労に関する遺物が皆無に近いこ とが特徴的である。本遺跡から150mほど離れた鴨居八幡社貝塚で古墳時代後期の貝塚と土錘、鹿角製釣り針、鹿角製組み合せ式銛頭などの漁労具が出土し、まさに海浜部の遺跡に似つかわしい状況を呈していることと比べ、極めて対称的である。

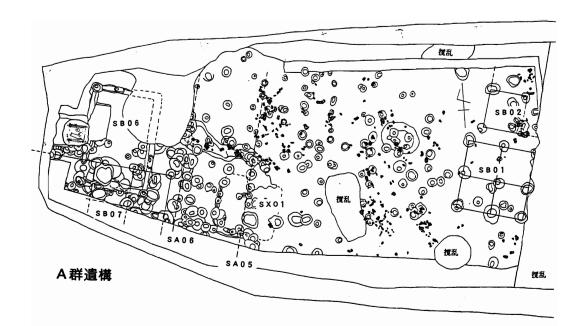
### 9. ま と め

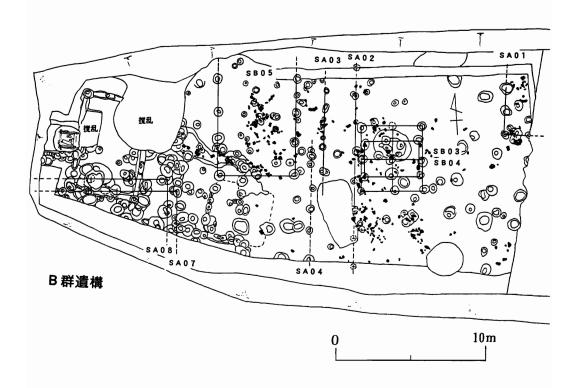
今回の調査では、古墳時代末前後の一般的な遺跡には類例の乏しい掘立柱建物址を主体とする遺構群が検出された。遺構群の始期は7世紀後半代と思われ、数次の変遷を経て、8世紀中頃には衰退していったものと考えられる。この遺構群の性格については調査範囲も狭く即断がに様相が異なっている。特に、B群では西としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてみた場合、SB05を中心としてある。これらの遺構群廃絶後の9世紀代には横板井竜組の井戸が築かれるが、この井戸に関連した他の遺構は検出されなかった。同時期の出土遺物も僅少であった。

古来、走水の地は『続日本紀』宝亀 2 (771) 年10月巳卯条に「今東海道は夷参駅より下総国に達す」と記載された東海道以前の駅路、いわゆる「古東海道」の東京湾渡海の拠点として一般的に理解されている。また、この駅路は『続日本紀』神護景雲 2 (768) 年 3 月巳朔条に「山海両路を承けて使命繁多」な下総国の三駅と武蔵国の二駅の記述があり、8世紀中頃にはすでにその機能を徐々に減じていたことが窺われるのである。このような、「古東海道」の盛衰は本遺跡で発見された遺構群の変遷とも重なるように思われ、興味深い。

上記のような動向は本遺跡からみてより安房 に近く、蓼原遺跡や神明谷戸遺跡などの所在す る久里浜湾岸地域の様相にも何らかの形で反映 しているものと思われる。

なお、現在の走水(走水湾一帯)ではこれまで本格的な発掘調査が全くなされておらず、 「古東海道」の東京湾渡海の拠点としての実態 は不明である。





小荷谷遺跡全体図

### 10. 清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡の調査

近野 正幸・岩崎 修

- 1. **所 在 地** 神奈川県愛甲郡清川村大字宮 ヶ瀬字馬場1.370他
- 2. 調査主体 神奈川県教育委員会
- 3. 調査担当者 近野正幸・岩崎修
- 4. 調査目的 宮ヶ瀬ダム建設にともなう事 前調査
- 5. 調**查期間** 平成4年4月2日~平成5年 3月31日
- 6. 調查面積 約8.600㎡

### 7. 遺跡の立地と伝承

本遺跡は、東丹沢山中の中津川により開析された河成段丘上に広がる遺跡群中、馬場・北原地区と呼ばれるもっとも広大な段丘(宮ヶ瀬 I 面群)上のほぼ中央部に位置している。遺跡の規模は東西に130m、南北に80mほどの広がりをもち、後世の造成により大きく三段(便宜上、西側から上・中・下段と呼ぶ)に分断されている。当初の地形を復元すると、ほぼ西から東へと下降する緩傾斜を呈するものとなるが、現状での西端と東端の比高差は約11mを測る。

遺跡の名称である「表の屋敷」というのは、 当地区の小名でもあり、それは宮ヶ瀬の開拓者 の屋敷であったとする伝承から来るものである。 宮ヶ瀬には以前より二つの開拓者伝説があり、 一つは宮ヶ瀬の馬場・北原地区より中津川を上 流方向に約3kmほど遡った付近に「長者屋敷」 と呼ばれる場所が存在し、その地に隠れ住んで いたと言われる矢口入道信吉という人物が宮ヶ瀬を開拓したとする伝説、もう一つは、応永の 頃に津久井青野原から宮ヶ瀬の地に来た井上角 之丞という人物が開拓したとする伝説であり、 後者の井上角之丞の屋敷とされるのが、先に挙 げた「表の屋敷」に相当するものである。

#### 8. 調査の概要

本遺跡の調査は、平成5年度も継続して行っており、これまでに中・近世のほか、平安時代 および縄文時代の遺構・遺物が確認されているが、今回は時代を中・近世に限って報告する。

検出された遺構としては、大溝(堀跡) 1条、

掘立柱建物址35棟、礎石建物址1棟、溝状遺構 9条、竪穴状遺構10基、土坑116基、段切7ヶ 所、地下式土坑(地下室)1基、井戸1基、墓壙 群1ヶ所である。

まず上段では、掘立柱建物址および土坑・井戸・竪穴状遺構(厩跡)が認められる。掘立柱建物址はいづれも方形の柱穴を基調にした配列をなし、中には庇のつくものも認められ、検出される土坑も建物址に伴って機能していたと考えられる。また伝承では、これらの遺構が展開する西側の一段高い部分に井上角之丞の墓があるとされていたが、調査の結果、その営造時期の一端を18世紀前半にもつ8基からなる墓壙群が発見され、人骨の遺存は良くないが、種々の副



図1 遺跡位置図(1:50,000)

葬品が出土している。さらには村に残る過去帳 と石塔に刻まれた戒名が一致することから、伝 承を裏付ける結果となった。その他、溜め井戸 1基が検出されたが、これまでの遺跡群内での 調査でも発見されておらず、唯一の事例である。

次に中段では、掘立柱建物址・土坑・竪穴状 遺構・地下式土坑・堀が検出されている。中で も堀は、遺跡の外周を、やや外開きのコの字形 に巡るものであるが、本来は、北側にある自然 の沢を利用した形での方形区画の堀であったと 考えられる。堀の断面形は南側がV字(薬研) を呈し、西側および東側と南側の一部が逆台形 (箱薬研) を呈するものである。さらに土橋状 に掘り残した入口部が南と東側の二ヶ所で確認 されており、三方を繋ぐ隅部にあっては、北東 部が未調査のため不明であるものの、南東部を 除き、いづれも未貫通であることから、空堀と して機能していたものと考えられる。

また覆土の観察からは、当初堀の内側には土 塁が存在したものと思われ、宝永スコリアの二 次堆積後に埋め戻されていることが窺われる。 堀の内部からは、陶磁器、金属・石製品、動物 遺存体などが多量に出土しており、堀自体はか なり長期間にわたり使用されていたことからも、 その構築時期については判然としないが、陶磁 器自体は13世紀中葉~18世紀前半代までのもの が認められる。堀の規模は、内法で東西約92m、 南北約83mを測る。堀の上幅は、南側部分で約 4 m、深さ約2.5mを測り、西側部分は幅約2 m、深さ約1.8mとやや規模の小さいものになっ ている。堀の内側からは、掘立柱建物址をはじ めとする遺構が検出されているが、堀が埋め戻 された後の時期の遺構と混在しており、年代を 判別する遺物も僅少で、なおかつ未整理状態の 現段階ではその区別が困難である。また、中段 の掘立柱建物址の分布からは、密集地と空白地 の存在が明らかであり、自ずと土地利用の様態 も窺知されるものである。

掘立柱建物址の柱穴内には地鎮用に古銭を埋 納したものや、陶磁器片などが認められる例が あるが、その中でも注目されるものに懸仏があ る。この懸仏は、現状で総高5.6cm、最大幅6.4 cmを測るものであり、鏡面ともに青銅の一鋳造

りで、頭部が欠損しているものの、おそらくは 十一面観音菩薩であると考えられる。非常に丁 寧な作りで製作年代は13世紀後半、製作地につ いては在地周辺部とされる。またその成分分析 からは、主として、銅が全体の58%、鉛が25%、 錫が10%という結果が導きだされている。

下段では、礎石(石場建)建物址・竪穴状遺 構・溝状遺構・堀などが発見されている。堀は 本来中段と繋がるものであるが、後世の削平を 受け、その大半が失われている。その他の遺構 は、南半分より集中して発見されており、いず れも18世紀後半~19世紀後半にかけてのもので ある。また礎石建物址を中心に広がる遺構とと もに、数枚の版築面が確認されており、その最 終面からは多量の焼土・灰とともに炭化材など が検出されており、幕末の火災の痕跡を留めて いる。これらの遺構については、調査区東側に 隣接する県道下部へとさらに展開するものであ り、調査の必要性が説かれるところである。

#### 9. ま と め

今回の調査により得た最大の成果は、丹沢の 山間部の地に、「表の屋敷」の伝承通り、ほぼ 一町四方の規模を有する堀、そして土塁を巡ら した方形館の存在を明らかにし得たことである。 方形館自体の時期については、陶磁器の年代も さることながら、やはり最近の研究でも明らか なごとく、その盛行期である15世紀後半代に帰 属するものと思われる。それと同様に、館の廃 棄(堀の埋め戻し)時期についても、遺物から の18世紀初頭の年代で、文献史学の成果とも齟 齬をきたさないものである。かかる館の居住者

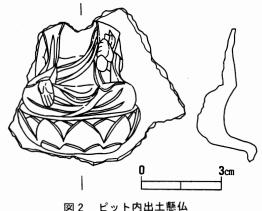


図 2 ピット内出土懸仏

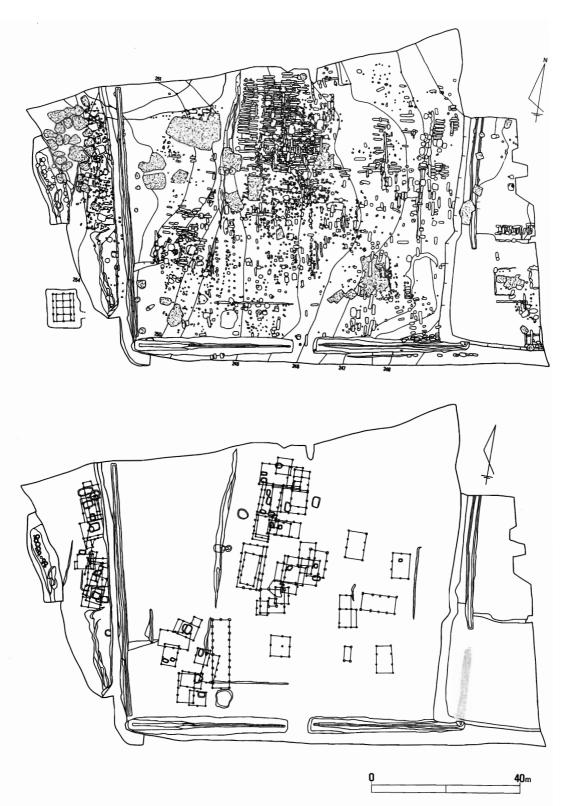


図3 表の屋敷遺跡中・近世遺構群全体図

の性格については、今後さらに検討を加えて行かなければならないが、仮に在地の土豪層であるにせよ、かなり精緻な作りの懸仏を有していることなどは、その性格の一端を物語るものと言えよう。一方、これまた伝承のある井上角之丞とその一族の墓所を明らかにし得たことからは、同時期の津久井青野原に、井上姓を名乗る有力者が存在したことと共に、宮ヶ瀬をめぐる開拓者伝承の信憑性を高める結果になったと言える。さらには、10世紀代に見る平安時代集落

の突如とした終焉の後、江戸時代までの間の宮 ヶ瀬は、足利氏の所領であったとされる時期の 文献に散見される以外は、ほぼ空白期であると 言っても過言ではない状況にある。

足掛け8年にわたる宮ヶ瀬遺跡群内の調査において、中・近世遺構・遺物を通して得られた情報は、予想以上の成果を生みだしており、該期の地域相の一端を明らかにしている。今回の調査による成果についても、上記の空白期を埋めるものとして高く評価されるものである。

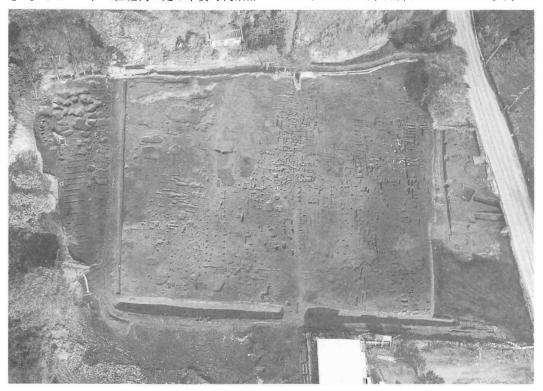


写真1 表の屋敷遺跡中・近世遺構群全景

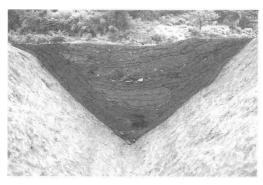


写真 2 堀跡土層堆積状況



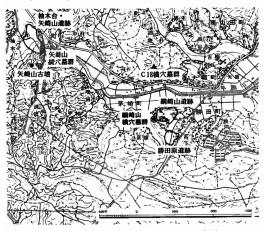
写真 3 堀内遺構群

# 11. 横浜市綱崎山横穴墓群の調査

鹿島 保宏・鈴木 重信

- 1. 所 在 地 横浜市港北区茅ケ崎町1014・ 1018他
- 2. 調査主体 横浜市埋蔵文化財センター (10月1日以降、財団法人 横浜市ふるさと歴史財団)
- 3. 調査担当者 鹿島保宏・鈴木重信
- 4.調査目的 港北ニュータウン建設事業に 伴う事前調査
- 5. 調査期間 平成4年7月28日~10月12日
- 6. 調査面積 約 1,200㎡
- 7. 遺跡の立地

東急田園都市線江田駅の東南東方約 1.6km、北緯35°27′29″、東経 139°35′12″付近に位置する。この付近一帯は、地形区分上「多摩丘陵」と「下末吉台地」との境界部に当っており、樹枝状の開析谷が発達している。本横穴墓群は、早淵川南岸に形成されたひとつの小規模な開析谷の西~南西面する斜面部に所在する。この斜面部の標高は、およそ15~30mをはかり、地形面区分の上では武蔵野面に相当する。



綱崎山横穴墓群(◉) と周辺の遺跡

#### 8. 調査の概要

本横穴墓群の調査は、造成工事中の不時発見によるものであり、緊急に対応して実施したものである。調査期間のうち、7月28~30日の3日間は、基数、および分布範囲確認のための予備的な調査にあてた。検出遺構・出土遺物は以下の通りである。

#### (1) 検出された遺構

横穴墓15基土 垃状落ち込み1基火泰2基性格不明の横穴4基

以上の検出遺構のうち、11号墓以下の横穴墓 6基については、遺存状態が悪く、12号墓のよ うに玄室奥の隅部のみがかろうじて確認された 例も含まれている。

6号墓北壁と重複する「土址状落ち込み」とした遺構は、表土除去作業の過程で上部にローム土が認められていることから、本来は6号墓玄室内から穿たれた小横穴であった可能性が高い。覆土中から須恵器甕片1点が出土している。本遺構の性格等については、明らかでない。

火葬墓は、調査区南東部の横穴墓群より上位の斜面部で2基が近接して検出された。この一帯はすでに削平されており、遺構の底面付近を残すのみであった。両者とも若干の歯と骨片・骨粉が遺存するのみで、貝を伴っていた。2号火葬墓の貝は、いずれも細片であるためその種類は不明であるが、1号火葬墓には、ハマグリ・ハイガイ・オオノガイがみられ、縄文土器片(黒浜式)の混入が認められた。これらの貝は、対岸の茅ヶ崎貝塚に由来する可能性が考えられる。火葬墓の所属時期については不明である。

「性格不明の横穴」のうち13´・18号穴は、地下水の浸蝕作用によって生じた穴を加工したものである。13号墓との関係から、加工の時期は横穴墓の構築以後である。10・14号穴は、構築途中の横穴墓である可能性もあるが、詳細不明である。覆土は黒色土を主体としていた。

## (2) 検出された遺物

須恵器 提瓶・フラスコ型提瓶・平瓶・

長頸瓶・広口壺・短頸坩・甕片

土師器 坏・埦

鉄製品 鉄刀・刀子・鉄鏃・不明金具

装身具 銅地鍍金耳環・銅地鍍銀耳環・

水晶製切子玉・管玉・ガラス丸

玉・ガラス小玉

その他 縄文土器片 (極少量)

土器類の出土状況は、前庭部出土例と玄室内出土例とがある。前者の例としては、1号墓の須恵長頸瓶・土師坏、2号墓の須恵平瓶、4号墓の須恵提瓶・土師坏、5号墓の須恵フラスコ型提瓶、7号墓の土師坏があり、後者の例としては、8号墓の須恵広口壺・フラスコ型提瓶、11号墓の須恵短頸坩、17号墓の土師坏がある。この他、13号墓玄室覆土および13´号穴内より同一個体の土師境が出土している。底部に回転糸切り痕をとどめる。13´号穴の掘削時期を示す資料と思われる。また、1号墓出土の土師坏は暗文を有する盤状坏で、胎土等から畿内産とみられる。

鉄製品・装身具類の出土状況は、2号墓の刀子、4号墓の鉄鏃・耳環・切子玉・管玉・ガラス丸玉・小玉、5号墓の鉄刀、6号墓のガラス小玉、9号墓の耳環、15号墓の鉄鏃・刀子・不明金具・ガラス小玉、16号墓の耳環・ガラス丸玉・小玉が玄室内から出土している。このほか9号墓前庭部覆土中の耳環2点、11号墓前庭部底面の小穴に埋め込まれた鉄刀1点がある。この鉄刀は故意に折り曲げられたものとみられ、特殊な出土状況を示していた。

#### 9. ま と め

ここでは、横穴墓群について若干のまとめを 試み、あわせて現地調査中に作成したデータを 提示しておきたい。人骨に関する所見は、聖マ リアンナ医科大学第二解剖学教室の森本岩太郎 教授によるものであり、3号墓玄室内の温・湿 度の測定は、東京国立文化財研究所の門倉武夫 文部技官の測定によるものである。

#### (1) 横穴墓群の特徴

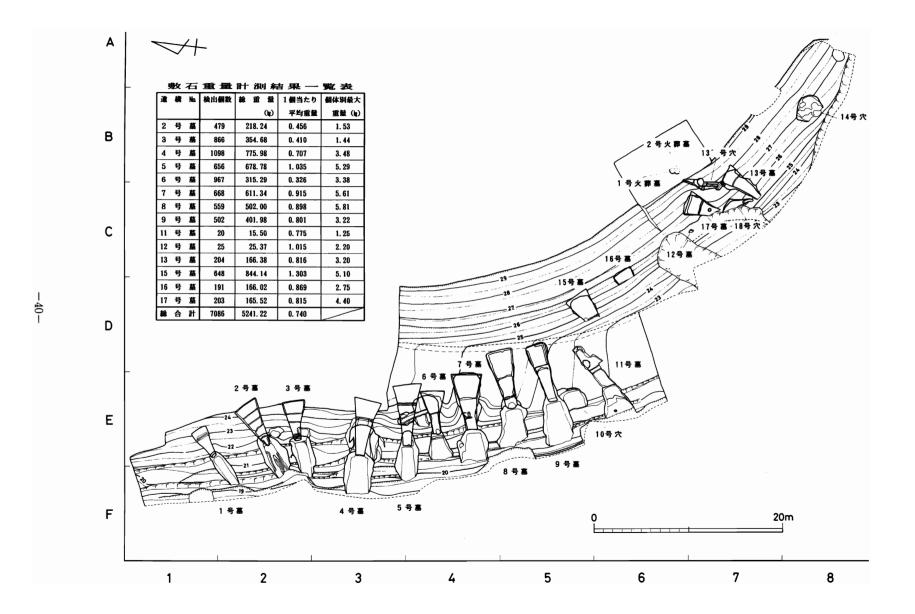
横穴墓群が開口する支谷は、北西から南東方 向に入り込むが、15・16号墓付近でその方向を 東南東に変える。このため斜面部に弱い稜線が 形成されている。横穴墓群は、この稜線により 1~11号墓の北群と12~17号墓の南群の大きく 2群に分けられる。北群の開口方向が西を指向 するものが主体であるのに対して、南群は南西 を指向するものが主体をなしている。その垂直 分布は、標高19~28m付近にあり、相対的に谷 の出口に近い北群が低く、奥側の南群が高い。 各横穴墓の掘削層位は、いずれも「東京軽石層」 直上の比較的安定したハードローム層である。

各横穴墓の構造的な特徴は、いずれも玄室と 羨道との境界が不明瞭で、前壁および袖部は認 められない。玄室横断面形が判明するものは、 すべてアーチ型を呈する。玄室の平面形態は、 ①奥壁幅が奥行きを上回わる逆台形を呈する例 (1~7・13・17号墓)、②奥行きが奥壁幅を 上回る逆台形を呈する例(8・15号墓)、③長 方形を呈する例(9号墓)が認められる。

床面施設には、最奥部に奥行きの狭い区画を有するものとより広い範囲の区画が認められるものがある。前者は、①の1~3・13・17号墓にみられる。この区画は低い壇状に造作されているものが普遍的な存在である。1号墓のみ壇上縁辺部が凸帯状をなしている。後者は、①の4~7号墓、②・③の8・9・15号墓にみられる。これらのうち4・15号墓では、段差によるほか板状に加工したシルト岩が区画に用いられている。敷石は、1号墓を除く各横穴墓にみられ、重量計測結果等は、遺構配置図中に示した。排水溝は2・3・7~9号墓に認められた。

閉塞は、2~4・7号墓の4基に遺存した。 閉塞位置はいずれも羨門部で、加工したシルト 岩ブロックが用いられていた。未開口の状態で 検出された3号墓では、シルト岩ブロックを積 み上げた後、前面をローム土で覆っていた。

前庭部は北群に遺存し、南群には遺存するものがなかった。その構造は、2号墓を除いて羨道底面とは明瞭な段をもって画されている。平面形態は、奥部の下端が羨道幅を大きく上回り、平面形が「コ」の字形を呈するもの(4・7~9号墓)、側壁が「ハ」の字状に開くもの(6・11号墓)、羨道幅との差が小さく、長く墓道状に延びるもの(1~3・5号墓)がみられる。



3 号墓 4 号墓 5 号墓 7 号墓 特に未開

(S = 1)

網崎山横穴墓群遺構配置図・垂直分布図

#### (2) 被葬者について

人骨が検出された横穴墓とその内容が判明する 主要なものは、以下の通りである。

3 号墓 1体 小児 (5・6才)

4 号墓 3 体 青年女性・熟年男性・小児

5号墓 1体? 成人骨片

7号墓 3体 壮年・成人・子供

特に未開口の状態で検出された3号墓については注意される。小児骨1体という現地調査中の所見が動かないものとすれば、小児の死をもって横穴墓造営の契機となり得たことを示唆する点、重要であろう。なお、同墓は形態的には末期的なものであり、副葬品は皆無であった。

## (3) 3号墓玄室内温・湿度測定結果

測定日、平成4年8月27日。測定地点、閉塞 施設前面より奥1.58m。

経 時	内温度	内湿度	外温度	外湿度
14:15			32℃	63.5~
14:30	18.7℃	89.0%		64.8%
14:40	18.6	95.5		
14:45	17.9	98.4		
14:50	17.8	<b>≑</b> 100		
14:55	17.7	<b>≒</b> 100		
15:10			31	65.0

以上のように、玄室内温度は外気温度約30℃に対して18℃、同湿度は外気湿度約65%に対して約 100%に保たれていたことが判明した。また、同時に炭酸ガス濃度の測定も実施し、玄室内0.2%、外気0.03~0.04%という結果を得た。(4) 横穴墓群の構成と年代

本横穴墓群は、先に北群と南群に大別できるとした。さらに平面および垂直分布から、北群の1~3号墓、4・5号墓、6・7号墓、南群の8・9・10号墓、15・16号墓、12・13・17号墓の小群を抽出できる。これらは「単位群」としてとらえられ、1単位群2~3基よりなる6単位群の累積の結果とみることが可能である。北群では4・5号墓、南群では15・16号墓の単位群が、それぞれ旧く位置付けられよう。

年代については、横穴墓の形態的な特徴、および4号墓や1号墓出土遺物等から7世紀初頭ないし前半代に造営が開始され8世紀前半代に及ぶものと考えられる。 (鈴木)

# 第17回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

発 行 神奈川県考古学会

編 集 秦野市立桜土手古墳展示館

発行日 1993年9月19日

印刷 ヤマダ印刷

	e de la companya de l			
		, <sup>5</sup> /		
	# 1			
	그림 - 이상 뭐나 하는 이			
	그는 얼마를 하고 말			
일은 하는 그 사람들이 얼굴하는 그 이야 함.				
	병기하셔널(11) 요요. 그는			
	The state of the s			
이 얼마 하는데 그 모든 아이들 보다 이 이 모든 것이 됐다.				
	하는 병원 등에 나올림을 하는 것이다.			
그는 하는 없는 사람이 되는 것이 되었다. 그 사람이 되었다.				
그렇게 되었다. 이번 그는 사람이 되어 되었다. 그렇게				
경기 이번 것은 사람들은 경기 나는 그는 유기				가장 그 사이 그리고 되다.
		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
			er i	
	4.4			
			potential and the second	
		100		
		100		
		1.57		

# 中世級館遺跡について

― 県内の調査事例を中心に ―

1993年9月19日

東海大学教授 石丸 熙

# 中世城館遺跡について 一県内の調査事例を中心に一

1 はじめに

斉藤慎一氏「城と館を解明する」(新視点日本の歴史 4 1993)

・・「城」と「館」を一括して新しい研究の糸口を開くということは、きわめて困難・・

考古学:「館」の研究

文献史学:研究史の見直し→「城とは何か」

- 2 城と館をめぐる近年の研究動向
  - (1) タチかヤカタか

館は「ヤカタ」ではなく「タチ」と訓むべし。

- ① 国司の「庁」「館」は、どちらも「タチ」といわれていた。
- ② 「楯」という表現もある。 (例) 源 義朝の「鎌倉之楯」
- ③ 「ヤカタ」には「屋形」の表記がある。 (例) 瀬 頼朝の「藍沢屋形」
- (2) 方形館のイメージ・チェンジ

橋口定志氏「中世方形館を巡る諸問題」(歴史評論 454 1988) 「中世東国の居館とその周辺」(日本史研究

330 1990)

方形館の出現は、およそ14.5世紀まで下る。

《参考》 『一遍上人絵伝』(13世紀末・14世紀初め成立)の 武士の館は方形館(図1)。

- 12・3世紀の館は、どのようであったか。
  - → 上浜田遺跡 (図2・4)、宮久保遺跡 (図3・5)
- (3) 中世都市論と城・館
  - ① 鎌倉・平泉(図6)・十三湊
  - ② 地方都市 ——— 「宿」と「館」
  - ③ 「堀ノ内」の見直し(図7)
  - ④ 「館の社会」論
  - ⑤ 城が先か館が先か
- 3 城館遺跡の調査事例から
  - (1) 都市鎌倉の館

「鎌倉城」と「鎌倉館」

御 所 ―― "館の社会の象徴 "

亭 一 執権 (得宗) 亭を「館」という

こともあった(図8・9)。

宅 一般御家人の宿館

(2) 早川城

周辺に丸山遺跡、宮久保遺跡、吉岡「堀ノ内」がある。

宮久保遺跡: I 期は12世紀中葉~13世紀前半

堀ノ内 : 方形館とすれば14世紀以降か。

早川城 : 宮久保遺跡 I 期と並存した要害色の濃い

館の存在。

(3) 真田城

真田余一の伝承→中世初期の武士の館の存在。 地形 (占地) が早川城に酷似。

## (4) 波多野城

所在比定地(寺山「小附」)で、館の主体部は確認できなかった。

→寺山「竹ノ内」辺か。

いずれにしても、中世初期の波多野氏館は「上浜田館」 に近い姿ではなかったか。

## 4 おわりに

「タチ」には、屋敷ないし政庁的要素と、要害としての要素があった。

この二つの要素が分離して、別個のタチを形成することもあったのではないか(早川城と周辺のタチ群)。

また、鎌倉のように、要害地にタチを中心とする集落が営まれることもあったか。

《参考》 上野国寺尾城と寺尾館(『吾妻鏡』)

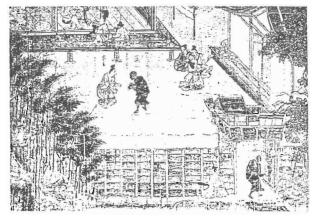


図1 筑前国の武士の館(一遍上人絵伝より)

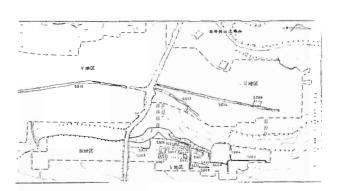


図2 上浜田遺跡 (季刊自然と文化 30)

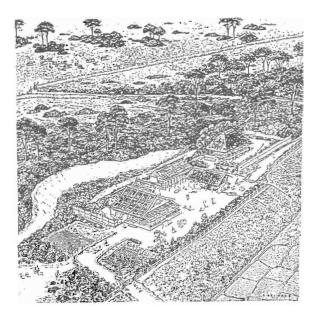


図4 相模国の武士の館-上浜田遺跡の復元 (週刊朝日百科日本の歴史 1)

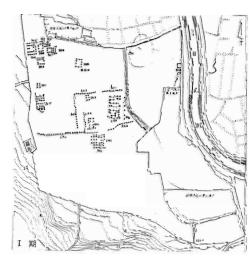
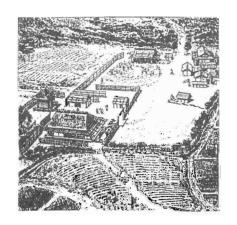


図3 宮久保遺跡 (同 左)



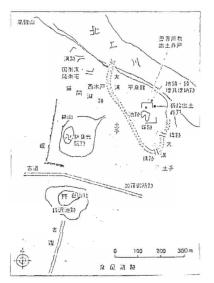


図6 平泉館(入間田宣夫『武者の世に』)



図 7 宇津木台遺跡の区画溝 (橋口定志「中世東国の 居館とその周辺」より) 尾根の中央をU字形に 溝が走る。

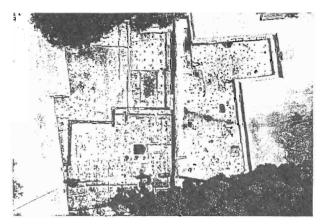


図8 今小路西遺跡

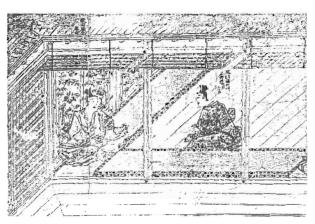


図9 鎌倉の安達泰盛即 (蒙古襲来絵詞より)

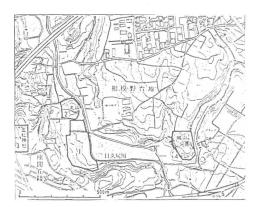


図10早川城跡周辺 (季刊自然と文化 30)

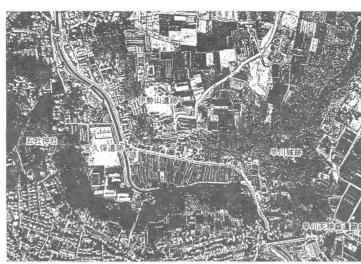


図11同 左(早川城Ⅱ)

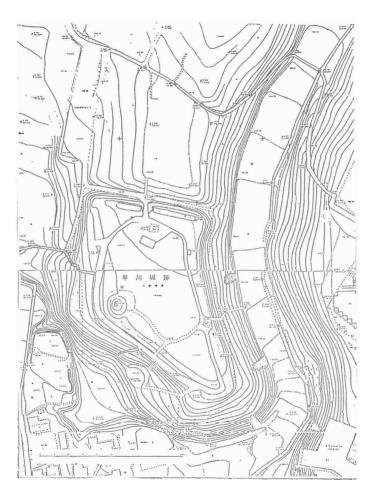


図12 早川城全測図(早川城 I)

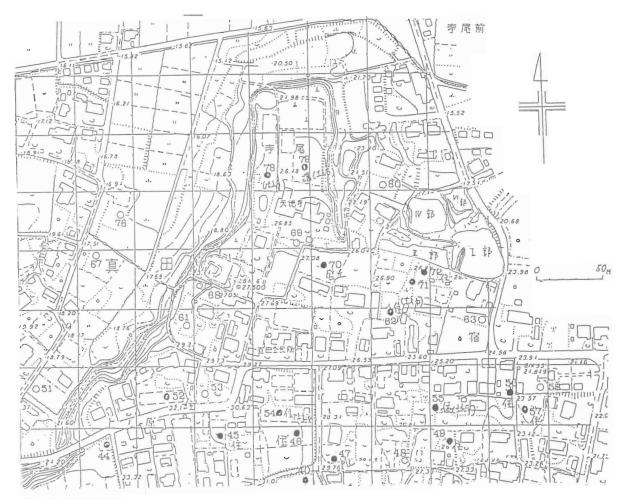


図13 真田城跡

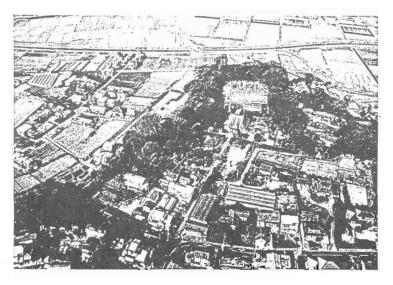


図14 同 上

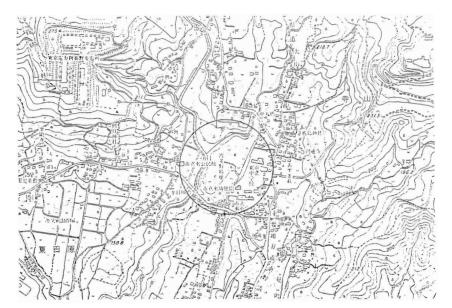


図15 波多野城跡 (素野の文化財 28)

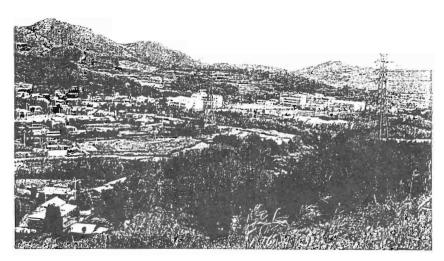


図16 同 上 (西北より)



図17 同 上 (東北より)